

---

# 遠い日の夢

y t

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遠い日の夢

### 【Nコード】

N71920

### 【作者名】

yt

### 【あらすじ】

ザナルカンド・エイブスのユースチームに所属するジェクトとクラウス。二人のスタープレイヤーの存在により、エイブスは黄金時代を築いていた。そんな中、ジェクトは対戦チームのカルハイムから意味深な言葉をかけられる。

## 前編（前書き）

スポ根です（笑） ジェクトお父さんの若い頃。オリジナルキャラ  
出てます。しかも主役級。スポーツのシーンは描写が難しかったです。  
…。

## 前編

よう、お前トーゼン正チーム目指すんだよな？

正チームって、ザナルカンド・エイブスの？

当たり前じゃんか。他にドコがあんだよ。

……そうだな。でもさ、僕たちって、ブリッツ取ったら何か残るものあるのかな？

はあ？ いきなり何だよ。

もしも僕たち、ブリッツと出会ってなかったら、どうなってたのかなと思って。

つまんねーこと考えてんなあ。そんなありえねーこと考えたことねえよ。

ありえない……か。そうだよな。おかしなことを言ってるな、僕は。

さあて、そろそろ出番だぜ相棒！

ジエクト。

あ？

……今日も勝つぞ。

へっ、俺様とお前がいるエイブスユースに勝てるチームがこの世界に存在するかよ！

ザナルカンドのブリッツボールスタジアムは、興奮の坩堝と化していた。フィールドをぐるりと取り囲む観客席の熱気が、凄まじい螺旋となつて夜空へと吸い込まれていく。歓声はまるで津波。遙か彼方まで届くそれは、今日が特別な日であるということをやナルカンド中に知らしめている。

フィールド内で目まぐるしく動き回る選手たちの一挙手一投足に数万の視線が注がれ、メガロポリスの夜は熱く燃えていた。その中でも、一際眩い輝きを放つ二人の少年の姿。

『よっしやア！ よこせクラウス！！』

『うてっ！ ジェクト！！』

線の細い少年から放たれた値千金のパスが、渦を描きながらディフェンスの間を縫って、豪快なシュート体勢を既に取っていたもう一人の少年の足下へと吸い込まれた。『うおるあ！』気合いを込めたシュートが爆音と共に放たれ、敵ゴールを襲う。キーパーも必死で手を伸ばすが、そのシュートの超絶な回転に耐えきれず、腕を弾かれてしまった。

ゴールネットを突き破らんばかりの勢いで突き刺さったボールが、試合の勝者を決定した。

『ゴオオ~~~~~ル！　そしてここで試合終了！！』

ザナルカンド・エイブスユース、最後はやはりこの二人の最強コンビが決めたあっ！

エイブス対マグナスはスコア二対一！　エイブスが勝利を収めましたっ！！』

ジエクト！

クラウス！

割れんばかりのコールが巻き起こる。そしてエイブスの勝利を演じた二人の英雄に、チームメイトたちが抱きついた。輪の中心で喜ぶジエクトとクラウス。若き力を存分に発揮し、今二人は燦然と光り輝いている。

『ジエクトとクラウス、名門ザナルカンド・エイブスユースが誇る両雄は健在です！

この分なら、近い将来シーズン中に正規リーグで二人の勇姿を見ることが出来そうですね！

実に先が楽しみな十七歳同士！　準決勝を見事に勝利で飾りましたっ！！』

「うおっしゃ！　天才大爆発！！」

ロッカールームに戻るなり、ジエクトは雄叫びを上げた。ユースチームナンバーワンを決定するトーナメント準決勝に勝利。喜びもひとしおである。ジエクトの身体からはゆらゆらと湯気が立ち上り、さながらその背中で鬨気の残滓がくすぶっているようだった。

「やったな、ジエクト！」

ジエクトの肩を叩いたのは、ゴールの立て役者クラウドだった。優しげな目尻を弛め、クラウドはにっこりと笑う。チームメイトたちもそんな二人のやりとりを笑顔で見守っていた。

「当たり前じゃねエか。俺様とお前がいりゃあ、エイブスの正規チームにだって勝てらア！」

ジエクトは高らかに笑った。言っていることは相当過激なのだが、彼からは不思議と嫌みを感じられない。いつか本当に実現してしまいたいような安心感が、ジエクトの発言からは漂っていたのだ。クラウドもそんなジエクトの言葉を聞いて、更に顔をほころばせた。

「お前も尚更女のファンが増えちまうな！ ま、俺様ほどじゃねーがなア！！」

「バアカ！ お前とクラウドスじゃ勝負になんねえって！」

「んだとコラア！」

チームメイトに殴りかかるジエクト。笑い声が、エイブスユースのロッカールームから響いた。

+++

トーナメント準決勝勝利の翌日、海岸には独り汗を流すクラウド

の姿があつた。ブリッツボールの練習には水があつた方が都合良いので、自然と海か川か、はたまた設備の整つたプールに場所が限られてしまう。クラウドスはボールを蹴り上げ、両脚に力を込める。ボールが太陽に重なり、一筋の影がクラウドスの整つた顔を覆つた直後、彼は砂を蹴つて跳んだ。

背筋力を最大限まで活用し、全身のバネを反らせ、その反動で落下してきたボールに渾身の蹴りを見舞う。ひしゃげた球体が唸りを上げて海面ぎりぎりを走つた。誰の眼から見ても凄まじい威力だと分かる。だがその弾道を見届け、地へと降り立ったクラウドスは溜息をついて笑つた。

「……やっぱり、あいつみたいには出来ないか」

汗を拭くと、ブラウンの髪の毛が陽に反射した。クラウドスは何かを考えているようだった。じつと水平線を見つめる。緑色の瞳が海の青を映し出し、きららかな光を放つていた。

「おお？ エイブスの貴公子殿、ここで秘密特訓ですかい？」

聞き慣れた野太い声。クラウドスは振り向かずに答える。

「まあね。明後日はダグルスとの決勝戦だから、当然といえば当然だろ？」

「言うねえ、さすがに」

エース・ジエクトがクラウドスの隣に立つ。クラウドスも百八十センチ以上の身長があるのだが、それでもジエクトの方が大きい。彼の恵まれた体格を、クラウドスは本当に羨ましく思う。そして、生まれながらにして持ち合わせているブリッツボールの才も、羨望の対象であつた。

ユースチームに加入したときから、ふたりはライバル同士だった。抜きん出た能力で他の者を圧倒するジェクトに追いつこうと、クラウスは努力に努力を重ねてきた。その血の滲むような努力の結果、今彼はユースの二枚看板としてジェクトと共にフィールドを縦横無尽に泳ぎ回っている。

「お前は、練習しないのか？」

「練習？　たリイよ。俺様みてえな天才にや、練習なんて必要ないのさ」

「はは、十七歳の言う台詞とは思えないな」

クラウスは微笑んだ。

潮騒が微かな香りを運び、海辺に静かな空気を漂わせている。クラウスはジェクトの顔をちらりと見た。彼は退屈そうに欠伸をしている。クラウスは知っていた。ジェクトは練習嫌いではないということ。ただ恥ずかしいがために、決して一生懸命な姿を皆の前に晒さないのだ。練習が終わり、チームメイトが帰った後、ジェクトは独り想像を絶する訓練をしていたのだ。

彼が満足いくまで練習したとしたら、他のチームメイトたちはともその苦痛に耐えることは出来ないだろう。ジェクトの性格からしてあり得ないとクラウスは思っているのだが、もしかするとそれを考慮した上で彼は正式な練習では他のチームメイトに合わせて、力を抜いていたのかも知れない。

「よっしゃ！　そろそろ始めるぜ！」

不意にジェクトが言った。

「ダグルスの連中なんか俺がいりゃ十分オツリが来るんだが、せっかくのパーティーだ、

客にもエンターテイメントってやつを提供してやんねーとな！」

そう言ってジエクトは足下に転がっていたボールを蹴り上げ、手に取った。

「そいつはいいことを聞いた」

背後で、声がした。「！」驚いたクラウドが振り返ると、そこにはローブを身に纏い、鋭い眼で二人を睨む少年が立っていた。彼は長い黒髪を潮風になびかせ、ゆっくりと二人に歩み寄る。刺々しい視線でジエクトを射抜き、彼は言った。

「お前の才能は認めてやるよ。だが些かダグルスを甘く見すぎているな。

クラウドがいないと“何も出来ない”お前じゃ、絶対に俺たちには勝てない」

「カルハイム……」

クラウドは一瞬眉間に皺を寄せた。

「聞き捨てならねーな、ダグルスの猿山大将がよう！」

「準決の俺たちのスコア知ってるか？」

「聞いているよ。ザナルカンド・ウアレフォル相手に六点差の完封試合だったってね」

「!?!」

さすがのジエクトも驚いた様子だ。カルハイムは表情を崩さず、依然厳しい口調で言った。

「お前たちエイブスの牙城は、明後日完全に崩れ去る。俺たち、ダ

グルスによってな  
「大した自信だね」

クラウドは冷静に言う。

「相棒” つてぬるま湯に浸りきってたお前なんて、敵じゃないってことだ」

「んだとオ!？」

「ジエクト、やめろ」

激昂するジエクトを、クラウドが制止する。だがその表情には明らかに憤りが見て取れた。

「用件はそれだけかい？ わざわざダグルスの好調ぶりを誇示しに来る場所でもないだろ？」

「……それもそうか。相変わらずクールだな、クラウド」

「ミッドフィルダー（MF）は常にチーム全体の動きを把握しなくちゃならないからね。」

いちいち感情的になってたら、円滑なゲーム運びなんて出来ないさ」

クラウドにとって、常に冷静さを失わないということは、極めて大きな意味を持っていた。それはブリッツボールの試合も私生活も変わらない。共通した、半ば教訓めいたものが彼の中には存在していたのである。今自分たちを挑発している、ザナルカンド・ダグルス主将のカルハイムに対しても、発言による気持ちの高ぶりを抑え、『一体彼は何を言おうとしているのか』を考えれば、自ずと気持ちは落ち着いてくる。

それが出来ず、殴りかかろうとしたのは言わずもがな、赤いバンダナ少年ジエクトであった。

「今日はお前に話があつて来た」  
「僕に？」

カルハイムの意外な発言に、クラウドは面食らった。「本当なのか？」カルハイムは続ける。だが、カルハイムの唇が次の言葉を紡ぎ出す前に、クラウドは彼が言わんとしていることを理解した。そして、今ここでその話題に触れられては困ると、咄嗟に声を出す。

「分かった」

「何？」

「後で話そう。そうか……もう、敵チームの主将であるお前にまで

……」

「あん？」

ひとり話題についていけず、ジェクトは首をかしげる。カルハイムはハツとして、クラウドを見た。

「クラウド、お前まさかまだ……」

「悪いなジェクト、練習はまた今度だ。カルハイムと少し話をしてくる」

「何だよ、感じ悪いな」

「すまん。ちよつとしたことだ。あとで埋め合わせは必ずするから」  
「ったく、仕方ねーな！ やいカルハイム！ 明後日は首洗って待ってるよー!!」

カルハイムは鼻先でジェクトをあしらうと、ふいと別の方向を向いてしまった。ジェクトは中指を立ててカルハイムへ突き出し、さつさと海岸を後にした。漣が一つ二つとクラウドの足元を濡らし、遠くで鷗の鳴き声が響いた。

カルハイムは神妙な面持ちになると、意を決してクラウドに言った。

「やはり、本当らしいな」

「どこで知った？ まだマスコミにも漏れてない情報だと思ったんだけどな」

カルハイムの方を見ず、クラウドが尋ねる。

「エイブスには知り合いがいてな。メンバーの中じゃ、結構噂になっているらしい。」

まあ、中には大事な相棒の情報に全く気づいていない馬鹿もいるようだが」

「……成る程。身内には隠しようがない、か」

「どうするつもりだ？ まだジェクトの奴には言っていないんだろ？」  
「言ったところで、何のメリットがある？」

クラウドはカルハイムを振り返り見た。男のカルハイムから見ても十分美しい双眸が、憂いをたたえて輝いている。「メリットとか、そういう問題じゃない」ライバルは強い口調で言う。

「カルハイム、僕とお前は敵同士だ。明後日の決勝で、ユースチームナンバーワンを賭けて戦う。」

エイブスにとって最大の障壁とも言えるダグルのエース・カルハイムにとっては、

僕のこんな情報なんてそれほど大した価値はないはずだろう？」

「……フン、そこまで言うなら上等だ。二日後はお前らエイブスを完膚なきまでに叩きのめしてやる」

「ああ、望むところぞ」

静かな闘志を燃やすクラウド。

だがその闘志にも、どこか強がった気配が隠されているように、  
ダグラス主将カルハイムは思った。

+++

ボールに初めて触れたのは一体いつだったのか、覚えていない。  
実際水の中でそれを追い回し、ブリッツボールの選手として自分を  
認識したのも、物心がついて間もなくのことだ。既にジエクトのブ  
リッツボール暦というのは、十年を優に超えていた。言わば、現在  
までの短い人生の大半をブリッツボールと共に生きてきたと言っ  
ても過言ではない。

クラウドが突然試合前に“もしも”の話をしたせいか、ジエクト  
はふと考えた。『ブリッツをやっていたら、自分は一体どう  
なっていたらうか』と。考えても考えても、その答えは湧出しな  
い。それどころか、深く思考すればするほど、背中を中心辺りから  
何か不快な冷気が彼の身体を包み込む。そして、“If”というY  
字路の片一方にある全き虚無が、恐ろしい想像となつてジエクトに  
憑り付いて離れなくなる。

そして同時に、自分が選んだ道の先に、大きな大きな、自分では  
決して超えることの出来ない岩山が聳えていたとしたら、どうした  
らいいのだろうと鬱に入り込む。今まで、ブリッツボールに全身全  
霊を込めてきた。他には何も見えなかったと思う。今までも、そし  
てこれからもそれが続くのだ。

だが、待て。

ずっとブリッツをやっけていきたい。辞めるつもりなんて微塵もない。だが、だがしかし、何らかの理由で“続けることが出来なくなってしまうとしたら”。自分は絶対にこの道を歩いていきたいのに、強制的に“脇道”を作られてしまったとしたら……。

或いは、自分の本懐をまっとうし、ブリッツボールをやり遂げたとしても、今のジェクトにはその先の人生が見えない。ずっとプレイヤーとしてブリッツボールに関わりたいのだ。解説者やコーチになる道など、御免だった。それが許されるのだと思っていた。プレイ中、彼は無敵だったのだから。“怪我”や“老い”は全て遙か彼方に漂う実体のないガスのようなものと信じていた。

それが理想で、現実であると、プールを我が物顔で泳ぎ回っているときのジェクトは疑う余地もなかった。

しかしひとたびプールから出たあと、ジェクトはもう無敵ではなくなっている。

人間として、ブリッツボールの選手として、恐れるべきものを普通以上に恐れる、弱き存在だった。

「…………クソッ！」

眼が覚めると、全身を汗が濡らしていた。既に冷えて身体中の熱が奪われていたらしく、意識がはつきりしてくるに従い、どうしようもない寒さが襲い掛かってくる。四角形をした部屋の天井が薄ぼんやりと見えていた。それ程湿気はない。気温も高くない。寝付きも良かった。やはり、認めたくはないが悪夢というもので起きてしまったのか……。

こんな夢は、初めてだった。

エイブスのスター選手として地位と名誉を手にした自分が、ある

日突然再起不能の怪我を負い、一線を退かなければならなくなる。だがブリッツボールしか出来ない自分に他の選択肢などなく、また根っからの頑固な性格が災いし、プレイヤー以外でブリッツと関わる仕事を良しとせず、遂に全てを失って凋落の一途を辿る、典型的な悪夢である。

笑い飛ばそうと思えば、笑い飛ばせた。頂に上ろうとしている最中の自分が、何を恐れる必要がある、と。しかしジエクトはもはやエイブスユースとしてだけでなく、正チームを含めた“ザナルカンド・エイブス”期待の超新星となりつつあった。試合を重ねることに評価は高まり、シユートを決めることに新聞や雑誌は一面で彼を祭り上げた。

もしかすると反比例するがごとく、ジエクトの悪夢に対する耐久力は失われていたのかも知れない。

「……こんな時間に眼エ醒ましちまった」

窓の外からは微かな光が漏れてくる。時計を見ると、夜明けまでまだたつぷり数時間はある。額に滲んだ汗を拭くと、ジエクトはベッドから降りた。コップに水を波々と汲み、一気に飲み干す。冷感の塊が喉から胃へと流れていく。

ふと、昼間の出来事が頭を巡った。

（そう言えば、クラウドの野郎カルハイムと何の話してやがったんだ？）

クラウドは常に周囲と一定の距離を置いていた。心の壁を作っているという訳ではなかったが、彼は決して心の底を他人に見せようとはしなかった。そんな彼も、ジエクトの前だと様子が違う。正反對の性格だからこそ、気の置けない親友同士になれたのかも知れな

い。

(俺の、勘違いか?)

今ジエクトは、クラウドのことが良く分からなくなっていた。

「ちっ、眼が冴えちまって仕方ねえ!」

そのまま彼は部屋から飛び出し、朝までオールナイトマラソンをする羽目となった。

+++

「あれ? クラウドは?」

翌日、ジエクトがエイブスの練習場へ顔を出すと、いつも一番に来て練習しているはずのクラウドの姿が見えない。クラウドは一番に来て、ジエクトは最後に来るとというのが恒例だ。

「ああ、なんかオヤジさんに呼び出されたらしいぜ」

「クラウドの親父……? あの資産家の?」

「あの人、ブリッツの運営資金も結構出してくれてるから逆らえないんだよなあ」

要するに、クラウドは大金持ちの御曹司だったのだ。だがその地位を、本人は余り好まなかった。数少ない情報によると、父親は息

子がブリッツボール選手になることに対して本気で反対したそうだがクラウスの決意は固く、現在まで親子の確執は続いているらしい。

「つたく、明日は世紀の大決戦だつてのによう！ “あのシュート”も完成してねえつてのに」

ジエクトはぶつぶつ文句を言いながら練習の準備をしている。そんな彼の態度を見て、チームメイトたちは息を潜めてお互いに顔を見合わせた。

「やっぱ、聞かされてないんだな、ジエクトの奴」

「ジエクトでも聞かされてないのに、俺たちが知ってるってのも何だか変だよな」

そんな囁きに気付いたのか、ジエクトが眼を細めて近付く。

「おい！ 昨日のカルハイムといいテメーらといい、最近内緒話が流行ってんのかよ！」

「い、いや……ジエクト、言いくいんだが……」

「何だよ」

「クラウスから、何か聞いてないのか？」

「あん？ 何を？」

いい加減うんざりしてきたジエクトが、声を荒げて言った直後だった。

「それは、僕から話そう」

プールに、一瞬にして水が張られた。莫大な量の水素を化学反応

させ、瞬時に巨大な球状のプールを満たす仕組みになっている。練習や試合前に、プールの中心で眩い光と共に爆発が起きるのはこのためだ。

そのプールの下にある出入り口から、クラウドが入ってきた。沈痛な面持ちで、どこか危うさを秘めた美しい姿だった。

「どういうことなんだよ！ イミわかんねーって!!」

「落ち着いてくれ、ジエクト。ややこしい話は省いて、単刀直入に言うよ」

その台詞に、エイブスのメンバーが驚愕した。

「明日の決勝が終わったら、僕はブリッツを辞める」

スフィアプール内の、聞こえないはずの水音まで聞こえそうなほどの静けさが訪れる。じっとジエクトの顔色を窺っているチームメイト。クラウドは表情を変えず、ジエクトを見つめている。彼の性格から鑑みれば、烈火のごとく怒り、クラウドと大乱闘を繰り広げる可能性があった。

しかし周囲の予想に反し、ジエクトはさっさとバンダナを巻き直し、プールへ向かって歩いていった。

「お、おい！ ジエクト!？」

チームメイトが声をかける。

「あん？」

「ジエクト、真剣に聞いてくれ」

クラウドが言う。ジエクトは眼を細めて彼の方を見た。

「馬鹿かお前。寝言ほざいてる暇あったら、さっさと練習行くぞ」  
「ジエクト……頼む」

すると突然、クラウスの頬に衝撃が走った。そしてそれは激痛と  
なつて全身を駆け巡り、彼の身体は後方へと吹き飛ばされた。切れ  
た唇から流れ出る血を拭い、クラウスは仲間たちに支えられた状態  
で立ち上がった。見れば、ジエクトは今にも噴火しそうなほど怒り  
狂っている。

これほど憤激している相方を、クラウスは見たことがない。だが  
それも、仕方のないことなのだ、彼は思う。全ては自分の身勝手  
ですること。ジエクトの想いを裏切り、エイブスのメンバーに背を  
向け、そして大好きなブリッツボールを前に、“自分の気持ちに”  
嘘をつくことに対する当然の報いなのだ。

「何が頼むだクソツタレ!! てめえそれマジで言ってるならば  
殺すぞ!」

「……」  
「いきなり何言い出すかと思つたら、ふざけやがって! 辞めるだ  
?! ハッ! 勝手にしろ!

ただし今日からだ! 明日の試合も、お前は絶対出るんじゃない  
っ!」

「ジエ、ジエクトっ!」

声をかけて引き留めようとするチームメイトだったが、すっかり  
我を忘れて怒り狂うジエクトに、もはや見境などない。クラウスに  
対し罵詈雑言を浴びせかけると、重い足音を響かせて、ジエクトは  
プールへ行ってしまった。残されたメンバーは呆然と立ちつくし、  
ジエクトの後ろ姿を見守っている少年の肩を叩くことしか出来な  
かった。

ジェクトはエースであると同時に、エイブスの主将でもあった。皆を先導する者として、個人的感情に支配されてはいけないことは重々承知しているつもりだった。だが、何故か、今回だけは我慢が出来ない。突然勝手なことを言い出すクラウスを、許す訳にはいかなかった。だが同時に、何故“理由”を聞いてやらなかったのかという考えや、どうしてあれほどブリッツボールのことを好きだったクラウスが『辞める』などと言い出したのかということが、ジェクトの心を惑わせる。

そしてふと、何故これほど怒り、我を忘れたのか分かった気がした。

(あいつが言い出すって……俺は何となく分かってたってのか?)

だがすぐ首を振って自らの考えを否定する。

「っざけんな!!」

何年一緒にいた？ 何度ボールを求めて競い合った？ これまで共に築き上げてきたものは、一体何だったのだ。結局のところ、クラウスと自分は真の意味でのパートナーではなかったのだろうか。冷静な思考など出来ようはずがない。

ジェクトはボールの入り口までやって来た。入り口といっても、開いた扉から球状のプール内に飛び込むだけなのだが。足下に転がるボールを、片手でむんずと掴み取る。ボールの中に、ジェクトとクラウスの姿が映し出された。物心ついた頃から共に練習し、コンビを組んできた。そして遂に、二人で開発した必殺シュートも完成間近となっていたのだ。

明日の決勝では、それを披露するはずだった。

それを武器に、ザナルカンド・エイブスの正規メンバーとしてリーグ戦に堂々と乗り込むはずだった。だがそれも……。

「……もう、終わりってことかよ」

ジエクトは呟き、ボールを握った手を思い切り振り上げると、床に向けて振り下ろした。投げつけられたボールは激しくバウンドし、乾いた音を響かせてジエクトの後方へ転がっていった。

「……クラウドス」

「仕方ないさ。どう考えたって、この混乱の元凶は僕だ」

ジエクトが去った後、クラウドスは唇をもう一度拭い、微笑んだ。

「ただどよう、お前辞めた後は……」

「父の仕事を手伝うことにする。まだ僕には荷が重いのかも知れないけどね」

「親父さんの仕事か。ってことは、間接的だけどブリッツと関われるってことだよな？」

「ああ、もちろん」

チームメイトが気を遣っているのを、クラウドスは知っている。決して“真実”には触れないからだ。ジエクトは理由を聞くことはしなかった。それはそれで彼の性格上仕方のないことだったのかも知れないのだが、クラウドスにとって、ブリッツボールから離れなければならぬ本当の理由を言葉にして親友に説明することは、凄まじい恐怖を伴った。

臆病と言ってしまったえばそれまでだった。実際、怖かった。夢ということにして、何もかもなかったことにしてしまえたら、どんなに楽だろう。不意に順風満帆の人生を覆った巨大な影は、この先ずっと自らを蝕み続けるのだ。逃げることなど、出来ないのだ……。

「さて、どうしたもんかな。キャプテンに出場停止食らっちゃったし……」

「クラウド……」  
「そんな暗い顔するなよみんな。明日は正念場だぞ？ ダグルスの連中に、眼にももの見せてやろう！」

クラウドが言った。エイブスのメンバーはそんな彼の健気な姿を見、その通りだと自分たちに活を入れる。それぞれがボールを持ってプール入り口へ走り出した。

「そうだ。ザナルカンド・エイブスは強くなきゃならない。立ち止まってる暇なんて、ないんだ」

独り言をぼつりと呟いたクラウドは、唇を噛み締めると同時に拳を強く握った。その腕は内側から溢れ出て来る感情のせいで止めどなく打ち震えている。何とか皆を発奮させようと努力はしてみたものの、チームの大黒柱である二人の亀裂が消えた訳ではない。そしてその亀裂は、そのままエイブスの戦力低下となつて如実に表れることだろう。

何とかしなければと思う副主将クラウドではあったが、不思議といつも心掛けている冷静な思考が、このときばかりはどうしても出なかつた。先ほど見た、ジェクトの悔しそうな顔がちらついて離れない。ジェクトはさぞ恨めしかったことだろう。信じていた仲間を裏切られたようなものだから。クラウドは心に大きな穴をあけてしまったのだ。勿論、ジェクトと自分の両方の心に……。

このままでは、絶対に勝てない。

そんな思いが、絶壁の淵に立ったクラウスの表情を一層曇らせるのだった。

+++

「うらあっ!!」

ザナルカンド・ダグルスの練習場。明日の決勝を控え、気力充実の選手たちは、最終調整の段階へ入っていた。普通この時間帯で無理な練習などもつての外のはずなのだが、その中に一人、修羅の形相で自らを痛めつける男がいた。言うまでもなく、ダグルス主将カールハイムである。

仲間たちの制止も聞かず、ただひたすら壁に向かってシュートを放つ。蹴り続けた足は赤く染まり、飛び散る汗で視界が滲んでいる。それでも尚、彼は蹴ることをやめなかった。

「キャ、キャプテン……ちょっとやりすぎじゃないすか？」

後輩のフォワード（FW）、リオスが心配そうに言う。彼もまた、強豪ダグルスにあつて周囲の期待を集めるストライカーだった。滝のように流れ落ちる汗を拭くと、カールハイムはリオスの顔など全く見ずに答える。

「俺の心配してる暇があったら、明日のために休んどけ」

「そ、それはキャプテンだって……」

「負けられねえんだよ、明日だけは」

「え？」

拭ってもすぐ額に噴出する汗が、一筋カルハイムの頬を伝った。

「エイブスとは何回も戦ったが、明日だけは負けられねえんだ」

「ど、どうしてですか？」

「……」

カルハイムは言葉に詰まる。

負けられない理由？ 明日だけは負けられない理由など、本当はないのかも知れない。試合は全て勝利してこそ、意味がある。特別な意味を持つ勝利など、カルハイムにとっては皆無だったはずだ。しかし、明日だけはどうしても勝ちたかった。いつからだろう？ カルハイムは考える。

(クラウドス……)

最初にその噂を聞いたとき、彼は笑ってそれを一蹴した。『ザナルカンド・エイブスのクラウドスが、膝の病気に罹っている』などというのは、どこかの三流記者がでっち上げた下らない似非ゴシップに過ぎないと思ったからだ。そんなはずはなかった。何度対戦しても、あのコンビを完璧に倒すことが出来なかった。ジェクトを抑えれば、クラウドスが網の目を縫うような千金のパスでダグルスのゴールを切り裂き、クラウドスに徹底マークを付ければ、ユースチーム・正チーム含め、この世界で最強のシユート力を持つエース・ジェクトが薄くなった自らのマークの上から決めてしまう。

かと言って、二人同時に動きを封じることなど、例えばカルハイム

が二人いたとしても無理だった。あの二人は、正に以心伝心。二人で一人なのだ。個々の力がずば抜けている上、二人合わさるとその力の合計以上のプレイを可能にする。

カルハイムは、エイブスとの試合に勝ったことはあっても、あの二人に勝ったことは一度たりともなかった。少なくとも、彼自身はそう考えている。その化け物のうちの一人が、病気などという安っぽい二文字にブリッツボール人生を台なしにされるということなどあるはずがない。いや、“あつてはならない”のだ。

だが、真実はカルハイムの心を見事に裏切つて見せた。

直接本人から聞こうとクラウドに問うたとき、彼は微笑んで頷いて見せた。浜辺でじつと海を見つめ、美しい双眸を悲哀で濁らせたクラウドを眼の当たりにし、カルハイムは確信したのである。『明日の決勝が、クラウドの引退試合なのだ』と。

「……いいか、リオス。ジエクトはお前に任せる。お前なら、絶対に奴を封じることが出来るはずだ」

「キャ、キャプテン？」

「クラウドは俺に任せる。エイブスの攻撃は、九割方あいつを起点に展開する。」

本当に怖いのは、ジエクトじゃない。阻止不能なシュートをアシストする、クラウドだ」

「キャプテ……」

リオスの呼びかけに答えることなく、カルハイムは再びボールを蹴り始めた。こうなるともう、外界とのコンタクトは不可能となる。だがその鬼気迫る光景は、リオスに大きな衝撃を与えた。これほど凄いいカルハイムは未だかつて見たことがない。ボールが破裂するのではないかと思われるほどの衝突音が、リオスの鼓動とシンクロしていた。

ジエクトは練習に来なかった。確かにプール入り口へ向かったところを、チーム全員が見ていたはずだった。だが、その姿は忽然と消えたのだ。キャプテンを欠いたエイブスは戸惑ったが、副将クラウスがそこを引き受け、その日の練習は無事終了と相成った。最後は円陣を組み、明日の決勝に向けて最後の気合を込める。だがその円の中心に、エースの姿はない。

クラウスとエイブスのメンバーたちは、何とも表現しがたい雰囲気何とか払拭しようとする力の限り声を出した。練習終了後、クラウスは一人水が抜けていくプールを見つめていた。

「……………」

頼む。二度と歩けなくなる前に、ブリッツボールを辞めてくれ。

父親の言葉が脳裏に浮かぶ。最初は勿論拒否した。歩けなくなつたとしても、最後までブリッツボールの選手として責務をまっとうしたかったからだ。

膝に出来た悪性の腫瘍が発見されたのは、数年前だった。最初は豆粒くらいのごく小さなものだったが、それは次第に大きくなっていった。手術をすれば切除は可能だったのだが、その代償が、余りにも大きすぎた。

手術をすれば、病気は治ります。転移の心配もありません。

ですが……。

(ブリッツボール選手としては、再起不能……か)

腫瘍の出来た位置が芳しくなく、手術によって切り開いた後の膝は、以前より格段に脆くなってしまふということだった。普通に暮らす分には問題ないが、激しい運動によって膝を酷使すれば、あつという間にボロボロになってしまい、悪くすれば歩行まで困難になってしまふという。まして、ブリッツボールなどもつての外だった。膝を使わない選手など、存在しない。クラウスは、眼の前が真っ暗になった気がした。

(それでも……それでも僕は……)

お願い、クラウス。あなたが歩けなくなる姿なんて、私は見たくない……。

父と母の姿。

放っておけば、膝から下を切断しなければならなくなる。父と母を悲しませたくない。

手術をしても、ブリッツボールが出来なくなる。これを失ったら、自分は一体……？

たちの悪い、悪夢だった。

「でも一試合だけ……明日の決勝戦だけは、あいつと一緒に、ブリッツがしたい」

クラウスは呟く。数年間、膝のことはジエクトに黙ってきた。ジエクトもジエクトで、クラウスのそんなことには気付くはずもなか

った。心配を掛けたくないというのが本心だったが、何よりも、今まで共に過ごしてきた親友に、自らの途中下車を打ち明けたくなかったのである。

一緒にエイブス正チームへ行つて、スタジアムで大暴れする……。ずっと前から約束していた。きっと出来る。ジエクトとなら、必ず出来る。そう信じていた。

「ジエクト……済まない」

クラウドはそう呟き、深く眼を閉じた。

+++

ジエクト。

あん？

引退したら、何する？

早っ！ もう引退話かよ！

きちんと老後の設計も立てておかないとね。

かーっ！ お前はホントにじじいみてーな奴だな！

例えばの話や。

……そーさなあ、全然思い浮かばねーや。

僕もだ。

何だよそりゃ。

引退したら、今僕たちがしていること、全部無駄になるのかなあ。

はあ？

信じてることとか、夢中になってること、引退したら全て忘れてしまっただろうか……？

バァーカ。お前ほんっつとバカ！

そうかな……。

お前な、引退したら忘れちまっくらい、今冷めてんのか？

え？

毎日俺らがやってること、全部忘れちまっくらい、お前怠けてんのか？

……そ、そんなわけないだろ！。

だろ？ 忘れねーよ。少なくとも、お前は“絶対”に。忘れるもんかよ。

……ジエクト。

あん？

済まない。ありがとう。

決勝戦。

ザナルカンドブリッツボールスタジアムは超満員だった。ユースチームの試合であるにも関わらず、まるで正規リーグの最終節のような盛況ぶりである。それだけ今日熱戦を繰り広げるであろう両チームに対する、ザナルカンドの注目は凄まじいものがあるということだ。観客たちは鼻肩チームの横断幕や団扇を振り回し、嬉々とした表情で今か今かと試合開始を待ちわびている。

女性客の多くは、Tシャツや団扇の中心にクラウドの顔がプリントされたものを身に付けているようだ。他にもエイブスのロゴやダグルのロゴ、選手たちへのメッセージなどが数多く見受けられる。ここに集まった人々はまだ、クラウドの身に降りかかった悲劇を知らない。そしてまた、今日が試合に出ているクラウドの姿を見ることが出来る、最後の日だということも、知る由もなかったのである。

『全世界のブリッツボールファンの皆様、今晩は！ 待ちに待った日がやってまいりました！』

今夜ザナルカンドにあるブリッツボールチームが所有する、ユースチームナンバーワンが決定します！

次代を担う若者たちの共演に、会場の熱気はヒートアップ！！

今宵は素晴らしい試合を期待いたしましょう！

対戦するのはご存知、名門ザナルカンド・エイブスと、そのエイブスと数々の名勝負を繰り広げ、

現在上り調子のザナルカンド・ダグルス！ 正に宿命の対決と言っ  
つていいでしょう！！

見事栄冠を手にするのは無敵のコンビ、ジエクト&クラウドを擁  
するエイブスか！？

はたまた二人と何度も熱い戦いを繰り広げてきたエース・カルハ  
イム率いるダグルスか？！

それでは各控え室の様子を窺ってみましょう！』

「俺たちはまだ、この大会でエイブスに勝ったことはない」

カルハイムを取り囲んだ、ダグルスの精鋭たちが頷く。皆闘志に  
満ちた眼で、じつと主将である彼を見詰めていた。カルハイムはそ  
んな選手たちの気を身体に浴び、続けた。

「だが、それも終わりだ」

ウォーミングアップでかいた汗が、熱い身体を冷却する。

「下馬評じゃ、俺たち不利の予想らしい。それは恐らく、あつちに  
ジエクトとクラウドがいるからだ」

畏怖すべき名を、カルハイムは口にした。

「奴らは強い。確かに、それは認めなければならない。俺たちが勝つためには避けて通れないからだ。」

「だが、俺たちはそれら全てを受け入れても勝てるだけの力がある。それだけの練習を、してきた」

全員が、力強く頷く。

「ジエクトが何本シユートを撃とうと、全部止めてやればいい。」

「クラウドがどんなパスを出そうと、全部カットしてやればいい。それだけのことだ。」

「負ける要素が、どこにある。勝てないわけがない！俺たちは勝つ！！」

「奴らエイブスを完膚なきまでに叩きのめして、俺たちがナンバーワンになるっ！！」

カルハイムの言葉と同時に、チームから歓声が上がった。

「行くぞお前ら！俺についてこい！！」

「若き戦士たちが、カルハイムを先頭にいよいよ決戦の舞台へ向かう。」

「しよ、正気かジエクトっ！？クラウドを……控えに回す?!」

一方のエイブス控え室では、不穏な空気が流れていた。ベンチに座った主将ジエクトから発表された今回のスターティングメンバーの中に、クラウスの名前がなかったのである。チームの大黒柱である二人が機能しないエイブスなど、他のチームメイトたちにとっては考えられないものだった。

ジエクトは発表後俯いてしまい、それ以上何も言わなかった。仲間たちにも、いよいよ彼に対する不満が募っていく。「おいっ！ジエクトっ！！」大きな声にも、ジエクトは無反応を決め込む。クラウスはただじっと、ジエクトとは反対側のベンチに座って眼を瞑っていた。

「ダグルスをナメてんのか！ ベストメンバー以外で勝てる相手じゃないんだぞっ！！」

「ウルセーな！ お前らクラウスがいねえとそんなに不安なのかよ！！ もうじきいなくなる奴だぞ？！」

いなくなったらその先、ただの弱小チームになっちまうってことじゃねーか！！」

正論だった。確かに、彼の言うことは正しい。クラウスに依存しきっていても、彼が抜けた後のザナルカンド・エイブスは支柱のない家となってしまう。現在トップレベルにランクされているエイブスだが、その地位も危うくなるということなのだ。

だが、ジエクトは勿論個人的感情を押し挟んでいない訳ではなかった。どうしても、クラウスの顔を直視出来ない。そして、ともにプレイすることが躊躇われる。こんな正体不明の感情は初めてだった。

「それは……そーだけどよう……」

「丁度いいハンデじゃないか、みんな」

するとそれまでじつと黙っていたクラウスが立ち上がり、チームに呼びかける。

「僕なしでもダグルスなんか敵じゃないってところを、ザナルカンド中に思い知らせてやれよ！」

「クラウス……」

「本人がこー言ってたんだ。文句はあるめえ？」

「クソツ！ ジェクト！！ お前いい加減にしろ！ クラウスもクラウスだ！ いつまで黙ってる！！」

ジェクト、よく聞け！ クラウスはなあ、本当は……」

『ザナルカンド・エイブス選手の皆さん、時間です。至急プールへお願いします』

チームメイトの一人が何か言おうとしたとき、アナウンスが流れた。ジェクトはその選手に対し、腕を振って言葉を中断させる。

「よっしゃ時間だ。行くぜためーら」

いつもの彼の台詞だが、何故か今日だけは心底厚かましく聞こえる。子供じみた我が侘を貫き通そうとしているように見える。ジェクトは早くも立ち上がって、プールへと続くドアを開いて行ってしまった。クラウスが声を出す。「ほらほら、どうしたみんな！ 時間だぞ！ 大暴れしてやれ！」水気を伴った重苦しいムードが、エイブスの結束という命綱を焼き切るうとしていく。

「何でだよクラウド！ どうして病気のことを言わないっ！！」  
「……………」

「このままじゃ、確実に負けるぞ！ それに、お前の最後の試合だろ？！ 悔いを残したいのか！？」

「病気のことを言えば、あいつは納得して僕といつものプレイをしてくれるかな？」

クラウドの言葉に、一同はつとずる。

「あいつは、そんなに大人じゃない。いつも一緒にいた僕だから分かるんだ。」

仮に僕が病気でブリッツボールを続けられなくなったことをジェクトに告げたとしても、

ぎくしゃくしたチームワークじゃどっちみちダグルスには勝てない。

僕がブリッツから離れると決意した時点で、もうジェクトと僕はコンビじゃなくなってたんだよ」

「じゃあ……………じゃあどうやって戦ってたんだよ！？」

俺たちを引っ張ってくれたジェクトとお前がバラバラで、俺たちはどうやって勝てばいいんだよ！？」

「……………ごめん。今の僕には、分からない。どうしたらいいのか、自分でも良く分からないんだ」

「クラウドス……………」

そのときクラウドの心の中では、何か澱んだ粘液状の感情が、彼の“声”を包み隠していた。本当のことをジェクトに告げるのが正しい方法だとは、決して思っていない。それに、今チームメイトに話して聞かせたジェクトと自分との関係も、虚偽ではない。

では、何が不満なのだろう。何が、この液体に隠されているのだろう。そもそも、何故自分はこうして“声”を隠しているのだろう。

そんな出口の見えない質疑が、クラウドの内面で繰り返される。

真実はひとつだけ。

膝の病気に冒されたクラウドは、本人の気持ちとは無関係に、ブリッツボールから離れなければならない。そのことを親友のジェクトに告げても、亀裂の入ってしまった関係を修復していつものプレイをすることは不可能。結局、どこにも曙光が差す隙間などないのである。

これが最後の試合だ。

もう二度と、選手としてブリッツボールを蹴ることは出来ない。クラウドは唇を噛んだ。喉の奥につかえている言葉が、“声”が、どうしても出てこない。真実を伝えるものでも、謝罪を表すものでもない。ただ純粹な、彼がブリッツボールとの歩みで見出した心からの“声”。

今日ジェクトに伝えなければ、その“声”は永久に効力を失ってしまうのに……。

崩壊寸前のザナルカンド・エイブスの選手たちが、茨の道を舞台へと向かう。

『いや、これは驚きました……。エイブス無敵コンビの一人、クラウドがベンチです！』

一体どうしたというのでしょうか。プール内にはジェクトの姿しか見えません。

対するダグルスはベストメンバー！ エース、カルハイムを筆頭に、エイブスの牙城を狙います！

注目のFWリオスの存在も大きなポイント。とにかくダグルスは攻撃力があります。

今大会を通じての得点アベレージは、他チームを大きく引き離しての一位！！

ポイントは驚愕の5・2得点です。四点以下の試合が全くありません！

そのほとんどを、カルハイムとリオスが叩き出しているという超攻撃型チームですね！

攻めと守りの要であるクラウドを欠いたエイブス、どうやってこの攻撃に耐えるのでしょうか？！

決勝戦は間もなくブリッツオフです！』

大きなどよめきが、エイブスの応援席から漏れて来る。クラウドファンの女性は大声でブーイングを始める始末だ。ジエクトはそんな周囲の喧騒から一人取り残され、水の中で過去へ遡っていた。何をすることも一緒だったクラウドが、ここにはいない。どうしてこんなことになったのだろうか、考えてみる。

それは自分のせいだ。クラウドの話も聞かず、一方的にチームから締め出してしまったのは、他でもない、一番の親友であるはずの自分なのだ。生まれつきの性分と言ってしまうえばそれまでだったが、ジエクトにとつて、一度張ってしまった意地というのは、崩すのが難しかった。自分から謝ったことなど右手に余るくらいだ。

だがそんな性格破綻者な彼でも、クラウドは分け隔てなく接してくれた。九分九厘自分の方に非がある諍いであったとしても決して謝罪しないジエクト。クラウドはそんな彼の性格を十分に分かった上で、いつも最後は仲直りに漕ぎ着ける最良の道筋をジエクトに示してくれたのだ。

思えば、本当にクラウドとの喧嘩で謝ったことがない。ジエクトは今更ながら驚いた。

一言も相談なく勝手にブリッツボールからの引退を宣言したクラウドを許す気には、なれない。だが一度でも、クラウドが理由もなく行動したことがあっただろうか。一度でも、自分の信念を曲げて行動したことがあっただろうか。

いいか？ 試合に負けたのはあいつがパスを落とさせたせいじゃない。僕たちが弱かっただけの話だぞ。

フン！ だけだよ、あいつが落とさなきゃ俺様がリターン受けて決めてたのも事実だぜ！

確信が持てるか？ 絶対に決めていたと。

ああ！ 当たり前よ！

ひよつとすると、いきなり脚が攣ってたかも知れないぞ？

ああ？

敵が突っ込んできて、シュートの軌道が逸れたかも知れない。ブロックされたかも。

……ね、ねーな！ そんなこたあ！

プールの水が突然抜けたかも。何故か空き缶が降ってきたかも。戦争が起こったかも……。

何だよ！ 何が言いてエんだクラウドス！！

つまりな、ブリッツボールに“絶対”なんてないんだ。他のスポーツだってそうだろう？

……。

スポーツだけじゃない。この世界に“絶対”なんてないはずさ。

ちっ。

だから、負けたのは僕たち全員の責任だ。あいつだけを責めるのはお門違いだよ。

……わあつたよ。おめーにやかなわねーぜホント。

……ごめんな、ジエクト。説教臭いこと言って。

何でおめーが謝んだよ。まったく、ホント、つくづく逆らえねー奴だな、お前は！

はは、助かるね、それは。

(……………“絶対”はない、か)

“絶対”にこの先も一緒にプレイしていける。クラウドスは“絶対”にブリッツボールを辞めない……………。

それは果たして、約束されたことだったのだろうか。自らの身に降りかかる出来事を読めない脆弱な人間という存在である以上、そんなことはあり得ないのではないだろうか。ジエクトは考える。だがどうしても、もう一步を踏み出すことが出来ない。後もう少しで、答えに辿り着けるというのに。

(くそう、俺は……俺はこんなに弱っちい奴だったってのかよ)

『ジエクト！ ボサツとするな！！ 試合が始まるぞ！！』

チームメイトの言葉で現世へ呼び戻されたジエクトは驚いて眼を開く。視線の先に、闘志を剥き出しにしてジエクトを睨み付けるカルハイムの姿があった。

『これはどういうことだ、ジエクト』

『……どうもこうもねエ。見た通りだぜ、カルハイム』

『クラウスなしで俺たちに勝つつもりか？』

『いけませんかねエ？』

カルハイムを挑発するように笑うジエクト。既に決勝戦は始まっているのだ。両チームの主将同士が、プール中央で睨み合う。カルハイムは溢れ出しそうになる怒りを必死で堪えていた。

『ナメるなよ、ジエクト』

『あん？』

『お前とクラウスに何があったのかは分からない。だが、覚悟しておくことだ。』

『この試合、お前たちは生き恥を晒すことになり、お前は名門の名に泥を塗ることになる』

『んだと？』

『恥ずかしさで正規チームになんかとても行けないような、そんな試合にしてやるよ。エース！』

『面白エ……やれるもんならやって見せてもらおうじゃねーか！』  
『ジエクト』

最後に、カルハイムは言った。

『お前の負けだ』  
『！？』

自らのポジションに戻るカルハイム。それを見守ったジエクトは、怒りで拳を強く握り締める。(なめやがって……始まる前から、勝った気でいやがる!) バンダナを結び直し、ジエクトはすぐに自分のポジションについた。だがその後ろに、頼れる相棒の姿はない。一瞬萎えかけた闘志を、何とかカルハイムに対する怒りで立て直す。退く訳にはいかない。ここで退いたら、何もかも終わりだ。

だがいつものような余裕は出てこない。これほどまでに、自分はクラウスという人間に力をもらっていたのかと、ジエクトは再び唇を噛みしめる。

「ジエクト……」

控え室のモニターに映し出される、エイブスとダグルス。だがクラウスは、そこに映っているのが本当にザナルカンド・エイブスなのかどうか確信が持てなかった。それほどまでに、今プールの中で試合開始を待っているエイブスは、全く別物に見えたのだ。

心底不安になる。だがその不安は自分がもたらしたもの……。その事実が、クラウスに重くのしかかる。ジエクトの後ろ姿も心なしか、小さく映った。

モニターの中で、選手たちが急に慌ただしく動き出す。ブリッツオフだ。惚けているうちに、試合が始まってしまったらしい。クラウドスの指定席に構えた控え選手が、懸命にボールをキープしようとして手を伸ばす。だがやはり、ダグルスの精鋭MF相手では荷が重いようだ。最初にボールをキープしたのは、ダグルスの方だった。

気付くと、クラウドスは無意識のうちに手を伸ばそうとしていた。その先にあるはずの、ボール目掛けて。だがその指先は虚しく空を切った。「くそ」短く呻いて、額を抑える。モニターでは、激しく攻め込まれるエイブスの選手たちが悪戦苦闘していた。

『リオス！ 回り込めっ！』

カルハイムの声と同時に、FWリオスがエイブスのディフェンダー（DF）の裏に回り込む。『やべえっ！ DF、もつと小さく囲め！』ジェクトが声を出す。ダグルスの余りに速い攻撃に対応が追いつかない。既にエイブス陣営はダグルスの攻撃陣によって掻き乱され、惨憺たる状況になっていた。

（指示を出すのがクラウドスじゃないから……みんな混乱してやがる！）

不慣れた司令塔をこなすジェクト。控えMFは突発的状况に対処出来るほど、能力が高くない。（チクシヨウ……俺は何でこんなに意地張ってんだ？ どうしてここまで……）頭では別のことを考えているが、身体はダグルスの攻撃を阻止するため、自動的に動き出す。カルハイムが所持するボールの行き先を予測し、最短のルートを辿ってゴール前に躍り出した。

案の定、カルハイムはラストパスをリオスが待ち構えるゴール前に放った。一発撃たれればゴールになりかねない危険距離だ。リオスの脚がボールを捉える直前、ジェクトの腕が伸び、パスの軌道を

逸らした。それでもボールの勢いは衰えない。フリーゾーンへと流れる。

『キーパー（KP）！！』

ジェクトが叫ぶ。ゴールを飛び出したエイブスのKPが、ダグリスの所有権外となったボールを必死で掴み取る。安堵の息を漏らすジェクト。時計を見れば、まだ試合は始まって五分も経っていない。これほど時間が長く感じたのは初めてだった。

（やべえ、何だこの疲労感は……！）

かつてないほど、彼は疲れていた。守りと攻撃を両方しなくてはならず、体力回復の余地がない。いつもはクラウスが守りの方を重点的に担ってくれていたため、単純に計算すれば今日のジェクトは二倍の仕事をしなければならぬ。しかも相手は超攻撃型のダグリスだ。自然と守りを固めなければならない。従って、エイブスは攻撃時間が極端に短くなってしまふということだ。

攻撃中も、常に相手のカウンターを警戒するジェクトは、敵陣深くまで切り込めずにいた。

（……にしても、このFW！）

ジェクトを執拗にマークし続けるリオス。攻撃だけでなく、ディフェンスも一流だった。フリーになってパスを受けようとするジェクトの死角を突いて現れ、ことごとくパスをカットする。そして、カルハイムのマークが手薄になったところを逆にパスを出されるのだ。無論、カルハイムからリオスへのパスも然りだ。

『がつ？！』

リオスのタツクルがジェクトを捉える。強い衝撃に、危うくボールを手放しそうになるが、何とか堪える。体勢を立て直そうとしたジェクトの前に、思っても見ない人物の影が現れる。

『カルハイム?!』

『随分辛そうだな、ジェクトっ!!』

『んだと?!』

『隙あり!』

囿として立ち塞がったカルハイムに気を取られた一瞬の隙を突かれ、ジェクトは背後から距離を詰めていたリオスにボールを奪われた。カルハイムもすぐにリオスをサポートすべく後を追う。チームの柱であるジェクトが不覚を取ったという事実にはアイブスは浮き足立っている。次々と守りを突破され、フォローも間に合わない。ジェクトも全力で後を追うが、素早くパスをつなぐダグルスのスピードには追いつけるはずもない。

あつという間にゴール前まで切り込まれ、リオスがラストパスをカルハイムの足下に送る。それは実に精緻な軌道を描き、ここしかないというような場所へと渡った。カルハイムはダイレクトでボールをゴールネットに向けて蹴り放つ。既にKPは眼中になかった。控え室のクラウス、思わず眼を瞑る。

『先制はダグルス~~~~!!』  
やはりクラウス不在の守りには隙があつたか、エイブス!!

カルハイムに屈辱の得点を許しました~~~~!!  
リオスも見事なアシストパスです!!』

頂垂れるエイブスの面々。このワンプレイで、既にエイブスとダグルスの力関係は明確になっていたのかも知れない。ジェクトは後

方からこの状況を眺めていることしか出来なかった。そして、完全に混乱しきっている自分に気付いた。今までこんな混乱は経験したことがない。脳内が激しく掻き回され、全ての思考を有耶無耶にされてしまっているようだった。

「馬鹿……あんなに簡単にボールを奪われるなんて……」

「おいおいおい！ どうなってんだ？！ ウチがあんな点の取られ方するなんて……」

スコアブックに一点を付し、記録係は頭を抱えた。クラウドはその横で唇を噛む。「この時間帯で一失点なんて、最近記憶にないな」控え選手たちも動揺を隠せない。

「こちら控え室！ ジェクトに選手交代を！」

控え室内に設置された通信機で、プールの脇にあるスタッフルームに連絡を取る。選手の交代はこの部屋を通して行わなければならない。スタッフルームに詰めているのはやはりエイブスのサポートスタッフであり、それぞれのブリッツボールチームには必ずサポートスタッフが設けられている。

すぐにプール内のジェクトに連絡が行く。プールに張られている特殊な水の中では、音声の周波数を変動させることによって特定の人物だけにそれを伝達することが可能となる。だが、プール内のジェクトは激しく首を横に振った。「ダメです！ 主将は必要ないと……」通信機を驚掴みにしたチームメイトが驚きの声を発する。

「んなにイ？！」

「……」

クラウドは依然厳しい顔つきである。

「あの野郎、いつまで意地張ってやがる！ 一点先制されてるってのに……」

「まだ一点だ。ジェクトの攻撃力があれば、すぐに取り返せるさ」

「クラウドス!?」

「でも……もし前半で二点差になるようなことになれば……」

そのとき、プール内が慌ただしくなった。

「マジかよ?!」

「ジェクトお?!」

パスミス。

普段のジェクトからは考えられない。あろうことが、敵チームにパスを出してしまったのだ。自分でも信じられないといった表情のジェクトが、画面に映し出される。何もかもが狂い始めていた。チームとしての機能も、ジェクトのブリッツボール選手としての機能も。

「いけない！ 右が薄い！」

クラウドスが悲鳴に似た叫びを上げる。

『リオス！ 右から切り崩せっ!!』

カルハイムの指示が飛び、ボールを持ったリオスが素早い動きで右側から攻め込む。ダグルスの攻撃陣が怒濤の如く押し寄せ、容赦ない猛攻が展開されていた。ジェクトも守りに回り、何とか状況を打開しようと動き回る。だがカルハイムとリオスの二名が織りなす完璧なまでのチームワークは、ジェクト単独で防ぎきれぬほど甘く

はなかった。ダグルス全体のテンションも高まっており、それらが巧い具合に相乗効果をもたらしている。

エイブスDFをかわし、リオスはジエクトと一対一となる。

『チクシヨウ、かかってこいや坊主っ!!』

『ジエクトさん……!!』

ジエクトとリオス。実力も経験も、ジエクトの方が上である。だが今に限って言えば、リオスのテンションは最高潮に達し、ジエクトとは真逆であり、更にこの日、リオスは絶好調であった。

(今の俺なら……)

(くそっ、今の俺じゃ……)

ジエクトの気迫が圧された。

リオスの腰が力強く回転し、水を掻き分ける。ジエクトも必死でマークにつくが、リオスの勢いは止まらない。水流の渦はリオスに味方している。ジエクトはボールだけを見据え、リオスの身体の動きに惑わされないようにする。だがそのボールが、彼の背中に隠れて見えなくなる。リオスが腕を回したのだ。ブリッツボールでは一秒ボールを見失うと、次に現れるのは数十メートル先である。ジエクトは今、完全にボールを死角に回されて見失っていた。

硬直する身体。(ど、どこだ……: ボールは、ど、どうすりゃいい?!) 次の瞬間、ボールは確かに現れた。カルハイムの腕の中に。ノールックパスが、完璧に決まった。

『し、しまった!』

『これまでだ、ジエクトっ!!』

必殺のスフィアシュートが、ジエクトの眼前で放たれた。コース

を狙ってなどいない。KPの構えど真ん中。それでも、決める自信がある。カルハイムのシュートが水の螺旋を描いてKPに突き刺さる。内蔵が絞り出されるほどの衝撃。水の中では踏ん張りが効かない。自らの筋力だけでシュートを止めねばならないのだ。

だがその威力は凄まじく、エイブスKPは耐えきれなかった。至近距離で撃たれたカルハイムのシュートは、KPとボール共々、エイブスのゴールに突き刺さった。

0  
2

ダグルス側の数字が、ひとつ積み重なった。会場が割れんばかりの歓声に包まれる。エイブスサイドからは悲鳴に似た声が上がった。カルハイムはカー杯拳を握りしめて天に突き上げた。ダグルスサイドは沸き立つばかり。前半終了間際、エイブスとダグルスの点差は二点に開いた。

T O B E C O N T I N U E D

## 後編

なあ、クラウド。どうやってたらそんなにパスが上手くなるんだ？

い、いきなり何だよ。

だってよう、俺様は確かに天才だ。ブリッツなら何でも出来ると  
思ってたぜ。

はは。そうかい。

でもお前のセンスだけにゃ、どうしても勝てる気がしねえんだ。

え？

特にパスだぜ！ お前背中に眼でもついてんじゃねーか？

そんなことあるはずないだろ。

だからよう、俺様がお前みたいなパスを身につけりゃ、チームは  
もっともっと強くなるんじゃないか？

うーん、確かにそうだよな。

だろ？

お前なら……何でも出来るかも知れないな。僕の唯一の武器である、パスでさえも……。

まーよ！

でも、それを身につけるまでは、僕が必要ってことだろ？

え？

だって、ジエクトが僕のパスを身につけたら、僕は必要なくなっちゃうじゃないか。

う……。

ジエクト、ブリッツボールは“不完全”だからこそ面白いと僕は思うんだ。

不完全だから、面白い？

完全な奴が一人いれば、確かにそのチームは強いかも知れない。でも、面白くないじゃないか。

そーかあ？

不完全な選手が二人……いや、沢山の不完全が合わさって“完全”を目指すから面白いんだよ。

ふへへ、哲学的だなオイ！

だからジエクト、独りで全部やるうなんて考えなくていいんだよ。

とか何とか言って、ホントは俺様に追い抜かれるのがイヤなんだから〜！

それもある。

この野郎、サラッと言いやがって！

ブリッツボールは“六人で一つのチーム”になるからこそ、面白いんだ……。

ザナルカンド・エイブスの控え室は、重い重い沈黙に支配されていた。誰一人として喋ろうとはしない。普段なら、いかに劣勢だったとしても諦めず、声を出して仲間たちを鼓舞する者が必ずいるのだ。しかし、今は違う。滴り落ちる汗を拭い、息を切らせ、精神的にも相当の疲労を負った選手たち。彼らを奮い立たせる光が、見えない。

主将ジエクトはただ俯いていた。頭の中では試合のスコアだけがぐねぐねと蠕動し、まとまった思考というものが全く出来ない状態だ。噛み締めた唇から、鉄の味がした。

「くそ……俺たちが、前半二点ビハインドだと……？」

誰かが言った。それは紛れもない事実であり、再び彼らが頂垂れるには十分な言葉だった。皆、この状況に確信を持ってない。何か、

悪い夢を見ているかのようである。試合の時間はあと半分。その間に、三点取らねば勝ちはない。運良く引き分けに持ち込んだとしても、あちらにはカルハイムとリオスの両ストライカーが控えている。延長では勝ち目はないし、それにも耐え忍んでもフリーキック合戦になれば、圧倒的にエイブス不利に変わりはないのである。

全員の脳裏にちらつき始めた“敗北”の二文字。だがこれまでの負けと違い、今回はそのダメージが甚大なものになるであろうことは、はっきりと予想出来た。

「…………ジエクト」

無言を切り裂いたのは、クラウドだった。

「…………」

「僕を、出してくれ」

「…………」

「頼む、ジエクト」

「うるせえ…………」

クラウドの嘆願を、ジエクトが突っぱねる。「勝手なこと、言ってんじゃねえ」タオルで顔を覆い、ジエクトはクラウドに言った。仲間たちが全員、押し黙る。

「お前が出たって、状況は変わらねえ。奴ら相手に、逆転は無理だ」

「まだいける」

「無理だつて！」

「黙れっ！ お前、本気でそんなこと言ってるのか！？」

突然クラウドが大きな声を出す。一同、眼を丸くした。

「ジエクト、お前は一体何だ?! 名門ザナルカンド・エイブスの未来を担う男だろっ!!」

僕が抜けるくらいでいつまでもいじけて、恥ずかしいと思わないのかっ!!」

「……んだと?」

「僕が憧れて、いつも目標にしてきたジエクトという男は、いつも劣勢から見事に逆転するんだ!

そんなことが出来るから、ジエクトはスターなんだよ! エイブスはお前にかかってるんだぞ!」

「う、うるせえっ!! 俺が何でも出来て、無敵の超人みたいに言うんじゃないっ!!」

俺は普通の人間なんだ! 出来ねえことは出来ねえし、怖いもんは怖いんだよ!

お前がいねえと何にも出来ねえ、ただのちっぽけで弱っちい人間なんだよっ!!」

初めて自分の気持ちをここまで吐露したジエクトを、クラウスをはじめザナルカンド・エイブスのメンバーは初めて眼の当たりにした。その姿は今までになく小さく見え、事の重大さがひしひしと伝わってくる。ジエクトもまた、心の中で葛藤を繰り返していたのであった。

クラウスが静かになった控え室に、再び音声をもたらず。

「言わないでおこうと思ったんだけど、やっぱり虫が良すぎた。はつきり、言っとく」

「?」

「ジエクト、僕は今、病気なんだ」

「……あんだと?」

「膝に悪性の腫瘍が出来て、手術しないと脚を切断しなきゃならなくなる。でも手術してしまうと、」

もう二度とブリッツボールが出来なくなってしまうんだ。どっちにしる、僕はここまでだったんだよ」

「ちょ、ちょっと待て……クラウス、お前何言ってるやがる?!」

ジエクトだけが知らされていなかった、真実。彼は慌てふためき、物乞いをするような眼でクラウスを見た。その顔は、クラウスが想像していたよりもずっと心許なく、そして、クラウス自身の心をズタズタに引き裂いた。凍りついた空気を吸い込むと、クラウスは更に続ける。

「本当はもつともつとブリッツをやっていたかった。お前と一緒に正チームへ行きたかったよ。」

でも、僕はもう父や母……様々な人たちに迷惑をかけたくないんだ。本当に、済まない……」

「て、てめえ、何で今までそれ……」

「僕は、怖かったんだと思う。それを伝えてしまったら、お前との関係が崩れてしまいそうで。」

でも結局、僕の身勝手な判断だった。エイブスのみんなやお前を傷つけてしまったんだ」

「ば、馬鹿野郎っ!!」

ジエクトが叫ぶ。

乱闘かと、場に緊迫した空気が流れ込む。だがやはり、ジエクトは何もしなかった。ただ、唇を噛んでクラウスを睨んでいた。「ジエクト、頼む。最後にもう一度だけ、お前の雄姿を傍で見せてくれ」俯き加減に言ったクラウス。その言葉が出た瞬間、周りのチームメイトたちが立ち上がった。

「よっしゃあ!! やったるぜ畜生があ!!」

「おうよ! 今日はクラウスの送別試合だ! デッケー花火三発、

上げてやるうじゃねえかつ!!」

「いいな?! ジェクト!!」

「ちょ、ちよつと待て! お前ら!」

「いや、いいんだ! 決定だ!! クラウス、準備しろっ! すぐ  
出番だぜ!!」

「……みんな」

眼頭が熱くなるのを抑えられない。クラウスは仲間たちの深い友情に感謝した。皆、元のエイブスに戻ったのだ。そして、残るは…。

「ジェクト……」

「……」

そのまま黙って、ジェクトはプールへと行ってしまった。

そしてこのとき、クラウスは決心した。ずっと言えなかった“言葉”を、伝えようと。

『さあ、怒涛の前半が終わり、いよいよ運命の後半戦に突入です!  
エイブスは思ってもみない展開でしょう! 前半で既に二点のビ  
ハインド!』

今までのエイブスからは考えられない脆さを露呈する結果となっ  
てしまいました。

それもそのはず、今回ジェクトとコンビを組むクラウスの姿を、  
我々は未だ眼にしておりません!

一体彼に何があつたのか!? ただひとつ言えることは、このままの試合運びでは、勝利は……ん?!」

スタジアムが凄まじい熱狂に包まれた。恐らく、今日一番の歓声だろう。その視線のほとんどは、エイブス側の入り口から出てきた一人の少年に注がれていた。美しいブラウンの髪の毛が水になびいている。穏やかな光を湛える緑色の瞳は、真っ直ぐに相手チームであるダグルスを見据えている。軽く背伸びをすると、彼は改めて、スタジアムを見渡した。

「クラウドです! クラウス遂に出てきました!!! これで両チームともベストメンバーです!

いよいよ雌雄を決するときが来ましたっ!!! ジェクトとクラウドのコンビは炸裂するのっ!?!」

クラウドに近づくカルハイム。「やっと出てきたか」カルハイムは闘志を剥き出しにした眼でクラウドを睨みつけた。その眼光からは憎しみや怒りは全く感じず、むしろ喜びが見て取れた。このモチベーションを維持されたら、一筋縄ではいかないということを再確認し、クラウドはカルハイムに微笑みかけた。

「ハンデには、丁度いい点差だろ?」

「……言っておくが、お前が考えているほど楽な点差じゃないぞ。この二点は」

「ああ、もちろん」

「特にエースがあんな調子じゃ、永久に俺たちから点は取れない」

カルハイムは、既にFWのポジションについて眼を閉じているジェクトを見遣った。本当に、今まで見たことのないようなジェクトだった。だがそこで、クラウドは再び微笑む。

「なあに、僕たちエイブスはね、後半が強いのだ」  
「……期待してるぜ」

カルハイムは行ってしまった。

確かに、このままでは勝てない。いくら自分が加入したとはいえ、肝心要のジエクトが今のままでは。

するとクラウドは真っ直ぐ、ジエクトの元へ向かった。心には既に、決意があった。

「ジエクト」

「……」

「始まる前は“僕がいなくても勝てるところを見せてやれ”とか偉そうなこと言ったけど、撤回するよ。」

あいつらは本当に強い。僕たちが全力以上を出さなきゃ、勝てない相手だった」

「ああ」

「でも、この試合に勝つことが出来れば、必ず……僕がいなくても勝てるようになる」

「……?」

「何故って、エイブスにはジエクトっていうスターがいるからね」

「まだ言うか。俺はスターでも英雄でもねえ。ただの……」

「お前はスターで英雄さ、ジエクト。僕がここまでブリッツを好きになれたのは、お前のお陰なんだ」

「?」

「お前がいなかったら、僕はこんなに一生懸命練習しなかった。お前がいなかったら、

僕は大会の決勝で、優勝を争う戦いに参加出来るほどの選手になつてなかった。」

辞めるのがこんなに辛いと思えるほど……ブリッツに熱くなれな  
かった』

『……』  
『僕はブリッツボールが好きなんだ。今までずっと曖昧だったけど、  
ようやく分かったよ』

『……』  
『だから勝とうよ、ジェクト。僕の最後の試合だからじゃなくて、  
僕らが勝つために勝とうよ！』

『……』  
『いいな?! “今日も勝つぞ、ジェクト”!』

……。

へっ!

『俺様とお前がいるエイブスユースに勝てるチームがこの世界に存在するかよっ!!』

『よよし、行こう!!』

Blitz Off……!

相手MFの遙か上を取り、ブリッツオフのボールをキープしたのはクラウスだった!

『た、高い!!』

ダグルスが驚愕するのも無理はない。初期のポジションから、MFは何の反動もつけずにブリッツオフのボールに飛びつかなければならぬ。従って、瞬発力の高さが焦点になる。クラウスはそれはずば抜けていた。あつという間に相手MFの動きを超越し、水中を自由自在に泳ぎ回る。

『チキショー! あの野郎、マジで膝悪イのか?!』

ジェクトが嬉しい悲鳴を上げる。その声も、観客席からの大歓声に掻き消された。『行くぞっ! ジェクト!!』クラウスが気合を込めて言う。瞬間、ジェクトの身体が震えた。恐怖でも寒気でもない。これは武者震いだ。クラウスに呼ばれるということが、ここまでの刺激を与えてくれる。だが、それも今日が最後なのだ。ジェクトは力の限り叫んだ。

『行くぜ相棒っ！！』

一気に蘇るザナルカンド・エイブス。クラウドを先頭に、一気呵成の攻めに転じる。

『来るぞリオス！ 当初の作戦通り、お前はジェクトを止める！  
クラウドは俺に……』

『よそ見してる暇があるなんて、たかが二点で随分いい気になって  
るみたいだね、カルハイム！』  
『?!』

突然耳元で声。驚きと戦慄がカルハイムの背筋を震わせる。

『な、速……』  
『っ！』

反応出来ないカルハイムの脇を、クラウドのパスが完璧に切り裂いた。正確な弾道を描き、逆サイドのFWへと渡るボール。ダゲルスのライフエンスは分断され、カルハイムの心拍数が一気に跳ね上がる。『慌てるなっ！ ジェクトの動きに気をつける！』指示が飛び、リオスがぴったりとジェクトに張り付く。これではジェクトも容易に切り込むことは出来ない。

クラウドはその状況をちらりと見、一瞬にして計算を終えていた。カルハイムを置き去りに、敵ゴールへまっしぐら。予想出来ないクラウドの動きに、カルハイムも必死に対応しようとマークにつく。

『こっちだ！』

クラウドが叫んだ。既に彼の射程内だ。ジェクトほどではないといえ、クラウドもまた凄まじいシュート力を持っている。相手にと

つて、自由にしてはいけないプレイヤーであった。手を挙げアピールするクラウドスへ、逆サイドから上がっていたエイブスFWがパスを出そうと振りかぶる。

すると何を思ったのか、クラウドはすつと身体を引いて後退した。すぐ傍に、ジェクトをマークするリオスの姿。パスが来る。リオスはクラウドが自分に背を向けていることを利用し、ゴール前のパスをカットすべくクラウドスへ近付いた。

「駄目だ！ リオス！！ ジェクトから離れるなっ！！」  
「えっ？！」

カルハイムの怒声に、びくりと動きを止めたリオス。クラウドは飛んできたボールに、正面から向かい合った。丁度、ボールが身体で隠れて背後のリオスの死角に入るように。

(えっ？！ ボール……見えな……)

クラウドの足先にボールが触れた。電流が脳を経由せずに彼の筋肉に进り、ボールの下半分に抵抗をかけるように、クラウドは指先で回転する球体を突いた。抵抗から逃れる方向を求め、ボールはクラウドの頭上を飛び越える。完全に勢いを殺した訳ではないので、その速さにリオスも全く反応出来ない。

回転をかけられたボールが、生き物のようにうねって水中を泳ぐ。そして、計算し尽くされた“ラストパス”の先にいたのは勿論…

『…』  
『つづりゃあっ！…！』

完全フリーとなったジェクトの足元で、ボールが醜くひしゃげた。迷いは何もない。そして、恐れるものも何もない。

ジエクトの左脚が、ダグルスのゴールを貫いた。

『ぐおおおおおる！！ 前半の沈黙は後半のための布石だったか！？』

後半一分、ダグルスゴールをこじ開けたのはやはりこの人、ジエクトオオオ！！

そして見事なアシストパスは“プリンス・オブ・ザ・ブリッツ”のクラウス〜！！

さあ反撃の狼煙は上がりました！ これが本当のザナルカンド・エイブスだあっ！！！！

待つてましたとばかりに、エイブスサイドの応援席が沸騰する。ダグルスサイドにとっては、最も復活して欲しくなかったコンビである。ジエクトとクラウスは、そのプレイでダグルス応援席を沈黙させて見せた。

ゴール前では、信じられないといった表情のリオス。ショックは大きい。カルハイムの言う通り、ジエクトを一瞬でもフリーにするべきではなかった。この失点は、紛れもなく自分の責任だと思った。

『ゴール前はクラウスのテリトリーだ。気にするな』  
『キャプテン……』

リオスの肩を叩いて励ますカルハイムの顔も、険しい。

『でも、クラウスさん、全然ジエクトさんの動きなんて見てなかったのにどうして……』

『分かるのさ』

『分かる？』

『クラウスには、ジエクトの動きや位置が分かるんだ。逆に、ジエ

クトにもクラウドの動きが分かってる。

だからジェクトも、わざとクラウドの方へお前を誘導したんだ。

“取りたくなる”パスを餌にしてな”

『……………！』

リオスは息を呑む。そこまで計算されていたのだろうか。あのパスはいくつもの偶然が重なり、たまたま絶好の位置にいたジェクトにクラウドがつかないだろうにしか、素人目には見えないだろう。だが事実は違うのだと、カルハイムは言っていたのける。全ては計算し尽くされていたことなのである。

こんな相手と戦っていたのかと、リオスは思った。

『まだリードはウチだ。リオス、お前はお前を信じる。練習を思い出せ！』

『は、はい！！』

『……………俺も、もう絶対にクラウドを自由にはさせん！』

鬼気迫る表情を、カルハイムはザナルカンド・エイブスに向ける。

『かあ〜っ！！ 痺れるぜえクラウドっ！！』

すっかりいつものテンションに戻ったジェクトが、クラウドに抱きつく。

『喜ぶのはまだ早いさ。まずは同点にしなきゃ、話にならない』

『おうっ！ もちろんだぜ！！』

『それに今の一点はカルハイムが僕を一瞬見失ってくれたから取れたんだ。』

あいつにマークされてたら、パスを出してる暇なんて与えてもらえなかったはずさ”

『勝負に“たら”、“れば”はナシだろが！ 結局一点入ったんだからいいんだよっ！』

『……それもそうだな。よし、ジエクト、まずは同点だ！』

『うっしや！ ヤローども！！ どんどん俺様に回せっ！ 全部決めてやらあ！！』

元気良く腕を振り回す主将の姿に、エイブスの面々も安心を取り戻す。

『その意気だ、キャプテン！』

ぼんと肩を叩き、クラウドはMFのポジションに向かった。そんな彼の後姿を見つめながら、ジエクトは思う。何故、もっと早く気付いてやれなかったのか……と。いつも一緒にいたはずなのに、結局のところ自分はクラウドのことを何も分かっていなかった。クラウドが、何の理由もなくブリッツを辞めるなどということを出しはしないのは、分かっていたはずなのに……。

ハーファタイムの控え室で、クラウドはジエクトに対して初めて病気のことを明かした。それを告白するのに、一体どれほどの勇気が必要としたのだろうか。もし立場が逆だったら、自分はクラウドと同じように、親友に病気のことを告げることが出来ただろうか。ジエクトは申し訳なさで胸が一杯になる。幼子のようにいつまでも、クラウドのことでいじけていた自分を心底恥ずかしく思う。

だからこそ、この試合で負けは許されない。

（クラウドは俺を信じてくれた。俺のお陰で、ブリッツが好きになったと言ってくれた……！）

自然と、笑みがこぼれる。

(なあ、おい相棒。お前昔、この世界に“絶対”なんてねえって言うてたよな?)

自らのポジションに就くジェクト。眼を閉じ、試合再開を待つ。

(……あるぜ、“絶対”は。お前の中によっ!)

聞き慣れたブザーの音。試合再開を告げる、魂のゴング。

(たとえブリッツを辞めたって、お前は“絶対”にブリッツを忘れてたりなんかしねえ!!)

クラウドがボールを蹴り取る。ダグルスに、クラウドより高く跳べる者などいない。

『今まで俺たちが信じてきたこと、“絶対”に忘れてたりなんかしねえよっ!!』

ジェクトが、エイブスが、勝利へ向けて飛び出した!

『くそっ! またエイブスポールか……!』

リオスが悔しそうに言う。ダグルスも、二点目をやる訳にはいかない。意地とプライドを込めたディフェンスで、エイブスの猛攻を食い止める。クラウドのパスがジェクトに通る。大歓声。ジェクトは身体を回転させ、追いつがるダグルスのディフェンス陣を次々と振り切っていく。正に水を得た魚だ。ジェクトを止められる者など、いるのかと思われるほどだった。立ち塞がったのはリオス。先ほどはオフフェンスで、見事ジェクトを出し抜いている。

『ここは行かせませんよ!!』

『出やがったな小僧っ!!』

『勝負っ!!』

強烈な衝撃に耐えるため、リオスは重心を前のめりに移動する。

『やなこった』その一瞬で、ジエクトがボールを後ろへ戻す。キャッチしたのはクラウス。ジエクトの背中を掠めるように、猛烈な速さでリオスを抜き去った。体重が前にかかっていた分、リオスはクラウスの動きに対応出来なかった。

『なっ?!』

『俺様がディフェンスのときに勝負してやるよ!』

にやりと笑い、ジエクトもすぐにリオスを置き去りにする。見事なコンビネーションに、スタジアムは大いに盛り上がる。ダブルスディフェンス陣を掻き回し、クラウスとジエクトは猛然とゴールへ向かって突き進んだ。二人の英雄に率いられ、自然とエイブスのメンバーも気持ちが高揚し、“やれる”という気持ちになる。

(ここで流れを堰き止める!)

クラウスの前に、カルハイムが立ち塞がった。

『さすが……! あの距離を詰めるなんて!』

ストップと同時に襲いかかるカルハイムの腕。身体を入れ替えて何とか凌ぐクラウス。背中からひしひしとカルハイムの圧力が伝わってくる。(たままないね、このプレッシャー!)思わず笑みがこぼれた。やはり自分はブリッツボールの選手なのだと再確認する。

この重圧を見事撥ね退けたときの快感がやめられない。  
スタジアムは両雄の一騎打ちに力の限り声援を送る。地鳴りのよ  
うな振動が、プールの中にまで伝わってきた。

クラウスがひとつフェイントを入れる。右への身体の動き。だが  
その程度の揺さぶりに、カルハイムは動じない。だがカルハイムか  
らも、クラウスのキープするボールが見えない。眼の前にいる宿敵  
は、どんな角度からでも抜こうとしてくる。過去何度それに苦汁を  
飲まされたことだろう。カルハイムは歯を食いしばる。気迫に満ち  
たディフェンスは、数十秒の間クラウスを微動だにさせなかった。  
エイブスもダブルスも、この炎のような戦いに水を差すことが出  
来ない。

ジエクトは前線でクラウスを待つ。必ず、ここまでボールを運ん  
でくれると信じて。

『……！』  
『ぬっつっ！……！』

強引に身体を寄せるクラウス。彼にしては珍しい、力押しだ。だ  
が体格的にカルハイムが勝っている分、多少の衝撃ではびくともし  
ない。『舐めるなっ！』逆にクラウスを押し返すカルハイムのタッ  
クル。並の選手なら簡単に吹き飛ばされ、ボールを奪われていると  
ころだ。

だがクラウスは、これ待っていた。  
滑るようにカルハイムの身体をすり抜ける。力の方向をずらし、  
完璧なまでのカルハイムの守りに穴を空けたのだ。

『し、しまっ……！！』

カルハイムの脳裏に、一瞬にして戦いの記憶が蘇る。

何度も抜かれた。

何度もボールを奪われた。

何度も眼の前でシュートを決められた。

何度も真横をパスで切り裂かれた。

何度もジエクトとクラウドの後ろ姿を見た。

何度も何度も、羨ましいと思った。

(負けて、たまるか!!)

カルハイムはジエクトに、そしてクラウドに憧れていた。超一流の選手二人が在籍しているザナルカンド・エイブスをいつもライブル視して、必死で彼らに追いつこうとしていた。絶対に負けを認めたくなかった。試合でエイブスに勝った日など、興奮して眠れなかったほどだ。だがジエクトを憎いとかクラウドを疎ましいとか、そんな負の感情を抱いたことは一度もなかった。

彼らがいたから、自分がいる。

だから、絶対に負けたくは……ない。

『うおお……っ!』

『えっ?!』

クラウドの腕の隙間から、ぬつと現れる別の腕。完璧に抜いたと思ったクラウドの頭の中が、一瞬にして真っ白になる。『取れ!』  
カルハイムが叫ぶ。敵陣深くまで切り込んでいたため、クラウドの

前にはDFが全員構えていた。そのうちの一人が、こぼれ球を拾う。

『なっ?!』

まさかクラウスがボールを奪われるとは思わず、ジエクトは最前線で急ブレーキをかける。形勢は逆転。今度はエイブスが攻め込まれる番だ。しかし守備陣が圧倒的に少ない。ダグルスは一斉にオフエンシヴポジションを取り、津波のようにエイブスゴールへ雪崩れ込み始めた。

『くそ、パスが速い……!!』

一心不乱に自軍ゴールへ戻ろうとするクラウスだが、ダグルスのパスワークの速さになかなか追いつくことが出来ない。翻弄されっぱなしのエイブス。このままでは三点目は時間の問題だった。

『行けエ！ トドメを刺してやれっ!』

カルハイムに渡ったパスが、ダイレクトでリオスに通る。絶好の位置だ。地の底から響くような歓声。試合に集中してこの大音量を気にしていないような選手でも、実際は大いに影響を受けている。それが味方の応援であったにしろ、敵チームを応援する声であったにしろ、白熱する戦いを繰り広げる選手たちにとってその声は自分を後押ししてくれるものなのである。

刹那、リオスはエイブスのゴールを見遣る。そこにはもう、自分を止めようとする防壁は存在しない。KPなど、この距離ならいなかっただけに出来る自信がある。迷わず彼はボールを自分の足元へ放った。そして、思い切り右脚を振りかぶる。熱に浮かされたように、リオスはそうすることしか出来なかった。

『来たなア！ 約束通り、勝負してやらア！』  
『えっ！？』

シュートを途中でやめ、リオスはもう一度ボールをキープせざるを得なかった。

(な、何でこの人……こんなところに?!)

とても信じられなかった。最前線にいたはずのジェクトが、眼前に立ち塞がって不敵な笑みを浮かべていたのである。どうしてエイブスはこうあり得ない事態ばかり起こすのか、リオスには到底理解出来なかった。

『生憎、ジェクトの泳力は直線だけなら世界一なんでね！』

クラウドが後方で笑う。『く、くそ……！ リオス！ 慌てるな、キープだっ！！』とうの昔に追い抜かれたカルハイムが、必死でリオスのサポートに向かう。当然プール内の全選手が、エイブスゴール前に集結しつつあった。

リオスは未だ経験したことのないプレッシャーに襲われていた。先ほどは上手い具合にジェクトを出し抜くことが出来た。そのときは、これが自分の実力で、それは十分ジェクト相手にも通用するのだと確信を持って断言することが出来た。だが今は、それが出来ない。

眼の前で笑っている人間が、本当に前半と同一人物なのか疑問だった。活力に満ち、心のそこからブリッツボールを楽しむ子供のようなジェクトは、もはやリオスの常識の範疇を超越していたのである。興奮が著しく冷め、凍りつくように冷静な思考がリオスを支配していく。そこにはもはや、マイナスのイメージしか浮かんでこなかった。

ジエクトはそんなリオスを見つめ、来るべきライバルに向けて言い放つ。

『小僧！ お前は大事な野郎だぜ。この俺様を一度とはいえ、見事に抜いたんだからよお！！』

お前はぜってー、将来エイブスの前に立ち塞がるライバルになるだろうぜ。

だからこの際、ハッキリ言っとしてやる。耳かっぽじってよおく聞きやがれ?!』

ジエクトがちらりと視線でクラウドに合図を送った。それを察知したクラウドは、突然動きを止める。そして本来、クラウドの動きから眼を離してはならないはずのカルハイムが、ここで完全にクラウドを見失うことになる。リオスとジエクトの攻防に、一瞬注意を奪われたためだ。

ハーフラインを全選手が突破し、プールの片方に選手たちが集結する中、クラウドだけが中盤のラインでストップしていたのである。

『そつだジエクト、教えてやれ……ザナルカンド・エイブスのライバルは……』

クラウドが微笑んで呟く。それは、ジエクトが今リオスに言っていることと同じ内容だった。リオスは何とかジエクトを抜こうと、先ほどと同じように腰を回転させてボールを死角へ流し込む。だが、それはもう悪あがきでしかなかった。今のジエクトには、全てが見える。それがたとえ、相手の身体に向こう側にあるボールであったとしても。

『俺に倒されるために存在するんだよっ!!』

背後から回されたジェクトの腕が、決して離すまいと懐に抱え込んだリオスのボールを弾いた。思ってもみない方向から加えられた力によって、圧力の均衡を崩された球体は、呆気なく彼の腕からぼろりとこぼれ落ちた。「あっ！」思わず声を漏らしたりオス。急いで回収しようと再び腕を伸ばすが、そこには既にジェクトの大きな身体があった。

トリッキーなジェクトの動きが読めないリオス。ジェクトはボールを止めることなく、そのまま前線に蹴り飛ばした。世界一のシュート力を持つ男のキックは、ボールを遙か彼方まで送り返す。その先には勿論、友を信じてクラウドが待ち構えていた。

「構うこたあねえっ！　ぶち抜けクラウドさ！！」

キャッチするや否や、クラウドは無人の荒野と化したダグルスフィールドを猛烈な速さで泳ぎ始めた。これにはその場に居合わせた全員が、驚嘆の息を漏らさずにはいられない。ダグルスDFも慌て戻るが、十分に態勢が整わないまま、クラウドの単独速攻を迎え撃つ。

（敵は三人！）

やつとのもので戻ったDF二人とKP一人が、クラウドの越えろべき障壁。まずは一人目。ボール目掛けてタツクルを仕掛けてきたDFを、上への動きでかわす。くるりと一回転し、勢いを殺さぬようにすぐに次の動作に移る。「行かせるかあっ！！」ダグルスDFの闘志溢れるディフェンスが、執拗にクラウドを襲っていた。一瞬でも気を抜けば取られる。そんな追いつめられた状況にあるにも関わらず、唇を喜びで歪ませるクラウド。

やはり自分は生粋のブリッツボール・プレイヤーなのだということ

とが判明した瞬間だ。彼は嬉しかった。観客からは凄まじい声援が送られてくる。ここで結果を残さなければ、名門ザナルカンド・エイブスのスターティングメンバーとしての名が廃る。

伸びてきた二人分の腕をかくぐり、クラウドスはボールを脚へ落とした。すぐさま蹴り上げ、今度は踵で後方から前方へと送る。その間身体はDF二人のスペースを巧みに潜り抜け、ボールをキヤッチする。尚も追いつがるDF二人。最後の手段として脚を伸ばす。これをおかしきれないと判断したクラウドスは、不意にボールから手を離れた。いや、離れたと言うより、手刀を繰り出すようにしてDFの脚の前に差し出したのである。

脚先にボールが掠め、クラウドスと二人の前方に流れる。

『よ、よしっ！』

これを好機と見たもう一人のDFが飛び出し、こぼれ球をキヤッチしようと両腕を精一杯伸ばした。だが驚くべきことに、ボールは彼の腕をすり抜けて上方へホップした。眼を丸くしてその行方を見守ることしか出来ないDF。そしてその視線の先に、彼が現れた。

『ぬっ、抜いた〜！！ クラウドス、DF二人を置き去りだ〜！！  
行け〜！ 行け行けクラウドス！！』

本来中立の立場でいなければならない実況が喚き叫んだ。自らの腕によるものと、相手のキックを利用した二乗の超回転がかけられたボールは、クラウドスの計算通り大きくホップし、魔法のように彼の腕の中へと戻ってきたのだ。完全に手玉に取られたDF二人は啞然とする他なかった。

クラウドスは眼光鋭く、最後に残ったKPを見据えた。どつしりと構えられては、シュートが撃ち辛くなる。浮き足立っている今を逃

せば、同点のチャンスはない。KPとの一対一。会場中が巨大な歓声の坩堝に飲み込まれ、その熱はプールの水を蒸発させてしまいそうな勢이었다。

KPは動かない。下手に飛び出せば、それこそクラウスの思うつぼである。ダグルスの正KPがそう何度も術中にはまる訳にはいかない。いくら速いとは言え、ジェクトほどのスピードは出ないのだ。KPはそれをまず念頭に入れ、クラウスを迎え撃つ。

『ジェクト……これは僕の、お前への置き土産だっ！！』

シュート体勢に移行するクラウス。と、突然その身体が激しく回転を始めた。放られたボールが落ちてくる。常人なら眼を回しそうな、万華鏡のような景色。だがクラウスはしつかりと、相手ゴール左隅に狙いを定めた。遠心力で血液が左右へ分散する。耳鳴りが響く。余りに激しい回転に、筋肉が悲鳴を上げる。だが、この一撃は外せない。自分がこれまで歩んできた道の証。見つけ出した答えが結晶化したものが、このシュートなのだ！

『はあっ！！』

右脚に確かな衝撃。ドンピシャのタイミングで、クラウスはシュートの全行程を終えた。その速度たるや、これまでのジェクトと同格、いや、それ以上だった。

『そ、そんな……』

完全に意表を突かれたダグルスKP。映像を早回しで見ているよくな気分だった。だがその早回しも、度が過ぎている。『馬鹿な……！？』信じられない方向へうねりながら、ここが水の中だとは思えないほどのスピードはそのまま、ボールは正確にダグルスゴール

左隅に突き刺さった。KPも必死で手を伸ばしていたのだが、ボールとの距離を見れば、数メートルはあっただろう。本当に、ボールは早回しで自分はスロー再生でもされているような、そんな気分だった。

『うお~~~~~?!!』

『スゲー~~~~~!!』

ジエクトをはじめ、仲間たち全員が天を仰いで驚く。スコアは全くの同点。だが勢いの面で、ザナルカンド・エイブスは完全に逆転に成功したのだった。

『後半八分四十二秒、遂に……遂にエイブスが試合を振り出しに戻した~~~~~!!』

決めたのはプリンス・オブ・ザ・ブリッツ、クラウス選手！  
今まで見たこともない必殺シュートが、ダグルのゴールをこじ開けました~~~~~!!

さあ試合の勝敗はますます混沌としてまいりました！一体この試合、どうなるのでしょうか!?!』

歓声の中心で、クラウスは激しく肩を上下させていた。いち早くその様子に気付いたジエクトが、クラウスへ声をかける。『お、おい！ 大丈夫か!?!』依然息を切らせてはいるが、クラウスは微笑んで答えた。

『ああ。ちよつとこのシュートは僕に合わないんでね。眼が回ったよ……』

『す、すげえシュートじゃねえか！ さすがの俺様もちびりそうだったぜクラウス!!!』

『ちよつと、僕もストライカーの気分つてやつを一度味わってみた

「かつたんだよ」

「じゅ、十分だぜ！ そんなすぐえシユート持つてる奴なんて、ザナルカンド中探してもいやしねえ！」

「言つたろ。僕には合わないシユートだつて」

「じゃあ何でそんなとんでもないシユート作つちまつたんだよ、この天才が！」

ジエクトが高笑いと共にクラウスの肩を叩いた。クラウスはそんなジエクトに言う。

「これはお前のためのシユートだ」

「……ハ？」

「お前がこの先、僕がいなくなつても大丈夫なように作つたんだ」

「な、何イ？！」

「僕の中途半端なシユート力じゃあれが限界だけど、お前ならきつと何もかもを吹き飛ばすような……」

そんなシユートに昇華してくれると思つてる

「ちょ、ちよつと待てよ！ あれを、俺が？！」

「それも、今この試合で完成させる。しかも一度きりのチャンスだ。もう時間がない。」

延長を戦い抜く体力は、もうエイブスには残されていないんだ。僕もお前も、もう限界だろ」

言われてみて初めて、ジエクトは今までになく疲れ切っている自分に気付いた。テンションと気合いで誤魔化してはきたが、もう腕も脚もパンパンに腫れ上がっている。前半クラウスなしで戦つた分、一気にそのツケが回ってきたのだらう。他のメンバーにも同じことが言える。ダグルスとの死闘で、攻守に渡り懸命のプレイを展開しているのだ。その表情には色濃く疲労が見て取れた。

『いいな。お前が、決めるんだ』

『ば、馬鹿言え！ 大体お前、あのシュート完成させるのにどれくらいかかったんだよ！』

『……構想を含めると三年だな』

『三年だあ？！ それを俺に一試合で決めろってのか！？』

『ああ』

『お前な、世の中にはどんなに頑張ったって普通の人間にや出来ねえことつてもんが……』

『お前が“普通の人間”じゃないから、こうして無茶を承知で頼んでる。他の誰にも無理なんだよ』

『だから、俺は普通の人間だって……』

『普通の人間は、この話題でそんなに笑ったりしないぞ』

自分でも気付かなかったのが不思議で仕方なかった。ジェクトはあのシュートが自分のものになることを聞いた途端、武者震いが止まらなくなっていたのだ。その顔には笑みすら浮かべるほどに。不可能に挑戦するときほど、燃える瞬間はなかった。その大胆不敵な挑戦心こそが、スター選手ジェクトの原動力だったのである。

『……』

『で、今日が最初で最後の御披露目となるシュートとそれを融合させる』

『？』

『おいおい、このままアレを出さないで僕にブリッツを辞めろってのか？』

何のためにあのシュートを練習してきたんだよ。ダグルスに一発決めてやるっぜ』

『あ』

『もう一度言うぞ。ジェクト、お前は天才だ。僕なんか足下にも及ばないほどの才能を持つてる。』

さっきのシュート、ちゃんと見てたな？」

『お、おうよ！』

『絶対に自分には扱えないシュートだと思ったか？』

『……』

『一朝一夕でコツが掴めないと思ったか？』

『……いや！』

『よおしいぞ！ 大体の要領は説明するが、実際に成功させるのはお前だ。いいな！！』

『おっしゃ！ やってやるっ！！』

クラウドは試合再開までの短い時間で、ジエクトにそのシュートの要領を伝えていった。

一方同点に追いつかれたダグルスは、完全に劣勢に回っていることを確信する。このままでは、ワンサイドゲームにもなりうる。カルハイムは重いムードに包まれるチームを何とかしなければならなかった。

『……みんな、集まれ』

集まったチームメイトたちの痛々しい姿。その身体からは闘志が消えかけていた。カルハイムは時計をちらりと見て、言葉を紡いだ。

『一か八か、賭けてみようと思う』

疲れが溜まっているであろうカルハイムを、じっと注視し続けるダグルスの面々。

『ジエクトとクラウドを止めたとしても、勝てるチームじゃない。各々が高い能力を持ち、

合わさることで手がつけられないチームになるのが、ザナルカン

ド・エイブスだ……。

今のあいつらは正にそれになりつつある。このままでは、俺たちは確実に負ける。

守っているだけでは、勝てない。攻めるぞ。力尽きるまで攻め続ける！ 延長なんて考えるな！

この三分で決着をつけるぞ。いいか、作戦は……」

いよいよ大詰め。双方の意地とプライドを賭けた戦いが、終局を迎えようとしていた。

「……分かったか、ジエクト」

「分かったかって……言われて簡単に出来そうなシユートならこんなに緊張しねーよ」

「でもその緊張がまた、たまらないんだろ？」

「分かってらっしゃる！」

笑い合う二人が腕を合わせる。「おう、エイブスは集まれ！」ジエクトがチームメイトたちに声をかけると、すぐに残りのメンバーが彼の周りに集まってきた。

「いいかア！……作戦はねエ！！」

「じゃあ集めんな馬鹿！」

「ひ、人の話を聞けっ！ 作戦はねエが、俺たちは勝アっ！！俺様が決勝弾をぶち込むからだア！」

「おおお〜？」

チームメイトが冷やかな視線を向ける。それに気付いたクラウドが笑ってフォローする。

「大丈夫。今度は本当だ。僕とジエクトが必ず決める。みんな、悪

いけどなるべくサポートしてくれ』

『おおお〜!!』

『何で俺とクラウドスじゃ反応が違うんだよ』

『そう気を落とすな、“エース・オブ・ザ・ブリッツ”!』

『おっ! 遂にジエクトにも通り名が出来たか!?!』

クラウドスの言った“エース・オブ・ザ・ブリッツ”に、一同大いに盛り上がる。

『……へっ、お前にしちゃセンスのいい名前じゃねえか』

『お褒めに預かり光栄だよ。キャプテン』

『よっしゃあ! ブリッツの“エース”と“プリンス”がいりゃあ、怖いもんなんてねえ!』

行くぜお前らア!! 俺様についてこいや!!』

天下分け目の残り五分、ブリッツオフと同時に、ダグルスが奇策に出た。

『な!?!』

『クラウドス!』

ボールをキープしたのはやはりクラウドスだった。だが、それ以前に、相手はクラウドスとボールを巡って争わなかった。クラウドスがキヤッチすると同時に、三人のダグルスが彼を取り囲む。カルハイム、リオス、そしてMFだった。

『でやあっ!!』

リオスのタックル。小柄な身体に似合わず、凄まじい威力だ。身体を丸くして受け流すクラウドスだが、その後方ではカルハイムが待

ち構えている。『ただぞクラウスっ!!』リオスの倍はあるとかという衝撃が、クラウスの背中に走った。背骨が軋み、痛みで一瞬意識が忘我の彼方へ追いやられる。何とかボールはキープしていたのだが、痛みで冷静な判断が出来ない。

するとその隙に乘じ、MFの選手がクラウスに渾身のシヨルダータックルを見舞う。ボールを持つ方の腕を強打し、堪らずボールが手を放れる。

『ぐ……っ!!』

『キャプテン！ 取りましたっ!!』

こぼれ球を拾い、リオスがカルハイムに声をかける。

『くそ、済まない！ ジェクト』

『気にすんな、一旦戻るぞ。奴らマジだぜ！ 今のだって反則ギリギリだ……!!』

ディフェンスに回るエイブス陣営。速攻を警戒してのことだったのだが、全員の配置が完了した後でも、ダグルスは攻め入ってこない。不審に思ったジェクト、ダグルスの方を見る。会場が大きなきわめきに包まれた。クラウスも、眉間に皺を寄せる。

『な、何だ？ ダグルスの奴ら、一直線に……』

ハーフライン上に、ダグルスのフィールドー全員が一直線に並んだ状態で静止している。FW二人、MF一人、DF二人の合計五人が、ザナルカンド・エイブス陣営を睨んでいた。だがクラウスは一瞬にしてその特異なフォーメーションの本質を見抜いた。

『タイトロープオフェンス……!!』

『ああ！？』

『ダグルスの奴ら……賭けに出たな』

『どーいうことだよ、クラウス！ 時間がねえぞ！』

『もう少し戦術の勉強しとけよ。ああやって一直線に並ぶことで、横に切れ目のない攻撃が出来るのさ』

『よ、横オ？！』

『でも縦はがら空きだ。オフENSする分には問題ないかも知れないけど、もし取られたら終わりだぞ……』

『横とか縦とか、俺たち一体どうすりゃいいってんだ？！』

混乱気味のジエクトが喚いているうちに、ダグルスが遂に攻撃を開始した。一本のロープのように連なった選手たちが、一斉にエイブスに向かって来る。奇襲に対し、応戦に戸惑うジエクト。クラウスは仲間たちに聞こえるよう、大きな声で叫ぶ。

『みんな、自分のマークするべき選手から眼を離すなっ！ デイフ  
ENSはそれでいい！！』

クラウスに従い、エイブスの選手はそれぞれが割り当てられたダグルスの選手に眼を向ける。すると自然に、エイブスの方も一直線のデイフENS隊形になる。それを見たとき、クラウスはハッと氣付いた。

『しまった……！ 奴らの狙いは……』

『よオし！！ 作戦通りだっ！！ 散れえっ！！』

カルハイムが指示を出すと同時に、ダグルスのタイトロープオフENSが崩れた。カルハイムの両脇を固める二人はそのまま、一番外側を泳ぐ二名の選手が、カルハイムの上下の位置へと移動を始めたのだ。エイブス側から見たその陣形は、二つの頂点が横に伸びた

四角形。カルハイムを中心にした、四角隊形であった。

『これは……タイトロップオフエンスからスクウェア・シフトへのフォーメーションチェンジ!?』

高度なフォーメーションチェンジを披露し、エイブスを攪乱するダグルス。その采配はずばりの中し、突然マークすべき人物の位置が全く入れ替わってしまったエイブスのディフェンスラインはズタズタに切り裂かれている。右往左往する選手たちは、一見すると素人のようだった。『くそおつ!』エイブスDFの一人が、ボールを持つカルハイムに突っ込む。

『ダメだ! まだ動くな!』

クラウスの制止で、DFが急停止する。クラウスがこのオフエンスの恐ろしさを知っていることを悟ったカルハイムは、すかさず右側へボールを流した。キャッチしたりオスが、今度はカルハイムの上方を泳ぐMFにパスを出す。間髪置かずMFはカルハイムの下方のDFにボールを流した。

『クソオ! 一体どうすりゃいいんだ?!』

ジエクトも、次の手を見出しかねている。

こんなとき、いつも窮地を救ったのはクラウスだった。

『……………』

『ど、どーするよ?!』

『ジエクト、これが……僕が手を貸す最後のディフェンスだ』

『ああ?!』

『そして次が、二人でやる……最後の攻撃だ!』

『……お、おう！』

『よし、じゃあ待とう』

『待つだあ?!』

『まだ、そのときじゃない』

『けどよう、これ以上攻め込まれちゃったら、手の付けようがなくなるぜ!』

『こつちも賭けに出るのさ。あつちが退けなくなるまで、引きつけるんだ!』

『……ちつ、お前の策にや毎回肝を冷やしたが、今回は今までで一番ハードだぜ!』

『いいか野郎どもオ! クラウス様の指示を待てエ! それまで絶対動くんじゃねえぞつ!!』

ジエクトが叫ぶ。萎えかけていたエイブスの闘志が再び燃え上がった。

彼らのそうしたやり取りの間も、ダグルスはパスを回し続ける。眼が回りそうなほどのパススピードだ。エイブスの選手たちは、こくりと唾を飲み込む。クラウスはただじつとそれを見据え、全く動こうとしない。ジエクトは親友を信じ、迫り来る津波のようなカルハイムたちの攻撃を待ち構える。

(上、左、下、上、右、下、左、下、右……)

『おおおおおいつ! クラウスよう! 別にビビっちゃいねえが……さすがにやべえぞオ?!』

(下、右、上、下、左、右、上、下、上……)

『チキショーツ! もうどうにでもなれえつ!!』

『よし! 分かったぞジエクト! みんな、一斉にかかれつ!』

『じゃあ! お許しが出たぜえつ! やっちまえ~~~~!!』

合図と共に、スクウェア・シフト陣形へ突進するザナルカンド・

エイブス。だが正確で速いパス回しに、エイブスの選手たちはボールではなく水を掴んでいた。それでも諦めず、必死の形相で追いつがるエイブスを嘲笑うかのように、ダグルスのパスは容赦なくプール内を駆け回る。

ジエクトでも、ボールに触れることすら出来ない。

「ち、ちきしょう！ 何てパスワークだ！ 奴らこんなスゲエの隠してたのかア?!」

網の目のようなパスの中、クラウドが飛び出す。

「!」

カルハイムがクラウドに気付き、唇を噛み締める。申し合わせたかのように、カルハイムの方へパスが飛んで来た。「うおお?!」ジエクトも驚く。誰も予想出来なかった弾道を、彼は読んだのだらうか。

(あれだけ速いパスワークだ。その場の閃きじゃ絶対に成立しないと踏んだけど……やっぱりな!)

「さすがだなクラウド！ こんなに早くパスルートを全部読み切るとは……!」

ダグルスのパスは、決してその場の思いつきで出されている訳ではなかった。定められた“順路”にボールを通すことよって成立している、れっきとしたチームパスワークであったのだ。今その一点を読み切り、クラウドはカルハイムがボールをキャッチする瞬間を狙う。タイミングは最高だ。クラウドは腕を伸ばし、ボールを奪おうとした。

「かかったなっ！ クラウス！！」  
「?!」

ワンタッチで、カルハイムはボールを弾いた。水を切ったクラウスの腕。ボールはカルハイムの後方へ流されたらしい。「な、後ろ……?!」カルハイムがぐいつと前方へ抜け出し、クラウスはその後方に信じがたい光景を眼にする。「六人目」が現れたのだ。フィールダーは全部で五人。ということは、この六人目の正体は……。

「KPだつて!? 馬鹿な、無謀にもほどがあるっ!!」

「ああ！ 無謀は百も承知だぜクラウス！ この奇策はお前を出し抜くために存在する！」

お前を騙せた時点で、賭けは俺たちの勝ちだ!!」

カルハイムを先頭にしたダグルスの陣形は、さながら立体的ダイヤモンドであった。ボールを持ったKPが、すかさずMFへパスを出す。再び尋常ではない速さのパスワークが開始された。しかも、頂点が一箇所増えた分、予測が全くつかない。今度は平面的な弾道のパスではなく、奥行きも加わった三次元の軌道である。

「これが俺たちダグルスの秘策、オフエンシヴ・ダイヤモンド！ さあ、行くぞっ!!」

巨大なダイヤに貫通されたクラウスは、戦慄と共にカルハイムの勝利へ対する執念めいたものをまざまざと見せ付けられた。もはやこの陣形を打ち破る術は残されていない。驚きと絶望が、彼の意識を覆っていった。次々と突破されるディフェンスライン。エイブスKPはもはや、ボールを眼で追うことすら困難になっていた。ゴールまで残り十メートル。十分シュートの射程内だ。

KPが意を決して飛び出した。その先には水中を滑るように走る

ボール。だが、完全にタイミングを狂わされたKPの指先を、ボールは無慈悲に通過していった。その先にはエースストライカーであるカルハイムの姿。決勝弾を決めるには、簡単すぎると言っても過言ではないほどの距離である。

しかしカルハイムは更に保険をかけることにした。誰もいなくなつた視界。彼はもう一人のストライカー、リオスにラストパスを送る。念には念を、ジエクトとクラウスがいるザナルカンド・エイブスに対し、完全勝利を収めるために。

その判断が、明暗を分けた。

パスを受けるリオス。もう誰も、このオフエンシヴ・ダイヤモンドを追ってくる者はいない。この日のために温存し続けた必殺のシフトだ。尊敬する先輩であるカルハイムの魂が込められたパス。絶対に外す訳にはいかない。鼓動が早まる。血液が動脈のハイウェイを駆け抜けてゆく。脳内の管制室はただ一つの指令しか通達しない。即ち、“絶対に決めよ”。神聖なる一撃は、誰にも邪魔させない。ダグルスは、常に勝ち続けねばならないのだから。

リオスの右脚が泡沫を纏って唸りを上げたとき、彼は不思議なものを見た。ボールと同じくらいの大きさである何かが、今正に蹴ろうとしているボールの眼の前に現れたのである。それには黒い毛が生え、コントラストを生み出すような赤い布切れが巻かれているように見える。

それが人間の頭部だと認識するまで、やたら時間がかかってしまった。

『ぶっ！！』

濁つた声を発し、その頭はボールの勢いを完全に相殺して吹き飛

ばされた。

『なっ!?!』

シユートを放ったりオスや、それを見守っていたカルハイム、そして敗北を覚悟したクラウスとザナルカンド・エイブスの面々、逆に勝利を後一步で逃したダグルスの選手たち、スタジアムに足を運んだ数万人の人々、この試合をモニターで見ているザナルカンド中があつと息を呑んだ。

力なく跳ね上がったボールを見て、周囲の水を自らの鼻血で薄紅色に染めたジエクトは叫んだ。

『KP、捕れえっ!!!』

『お、おう!!!』

その声で金縛りが解けたエイブSP、こぼれ球を両手でガッツリとキャッチ。このガッツ溢れるスーパープレイに、観客が嵐のような歓声を発したことは言うまでもない。

『そ、そんな……そんな、馬鹿な?!!!』

『リオスっ! も、戻れ! 速攻来るぞ!』

シヨックを隠しきれないダグルスの面々。中でも、カルハイムは計り知れないダメージをその精神に負っていた。完璧に、決まっていたはずのシユートだったのに……。一体全体、何がどうなっているのか、思考が間に合わない。

『うわははは!!!! どんなに複雑で読めねえパスワードだろうが、最終的にシユート撃つのは一人!』

この俺様にかかりや、そんな小細工なんざイチコロなんだよオ！  
恐れ入ったかダグルスっ！！

……いでで、参ったな……血イ止まんねえ。骨でも……折れたか？  
？」

『ジエ、ジエクト！！ 凄いよ！ あの場面でリオスへのパスを読むなんて！！』

クラウドが顔を綻ばせて駆けつける。

『（読んだア？ てめーと一緒にすんな馬鹿。ただボール追ってたまたま目の前に来ただけだよ！）

まーよ！ 何たって俺様、天才だから！ 奴らの作戦なんてお見通しってワケ！！』

『今回ばかりは信じるよ。このディフェンスは大きい！ 奴ら意気消沈してるぞ！』

『てことは、攻めるなら今だな！』

『ああ！ はつきり教えてやろう！ エイブスとダグルス、どっちが真のチャンピオンなのか！』

『よっしゃ！ KP、クラウドにボール出せ！ DFは守り堅めな！ FW、俺たちについて来い！！』

KPがクラウドにボールを託す。精悍な容貌をより一層引き締め、彼は最後の攻撃へと向かっていった。どうやら、自分も限界らしい。体力の消耗もそうだが、何より、膝が絶叫している。いや、今まで我慢してくれて幸いだったと感謝するべきなのだろう。これ以前の試合でも、度々痛みが走ることはあったが、今回の激痛は正に地獄だった。本当に、これが最後なのだと思つて。砕けそうな膝を眼一杯躍動させ、クラウドは勝利へのヴィクトリーロードを往く。

カルハイムは震えていた。理由は分からない。まだ時間はあるし、

敗北が決まった訳でもない。ただ、何かが怖かった。迫り来るライバルたちの姿が、いつになく大きく瞳に映る。

（俺は何か……勘違いをしていたのか？ 本当に恐れるべきは、クラウスのパスだと思っていた。）

ジエクトの能力が未だ完成されていないから、侮っていたのか……？

実際、そうだったはずだ。ジエクトはクラウスよりも洗練されていない、荒削りの選手だった！

だが……あいつは一点を俺たちからもぎ取り、必殺のオフエンシヴ・ダイヤモンドを破った……！

一体、ジエクトという男はどれほどの可能性を秘めているというんだ！？）

『残り一分！』

誰かが叫んだ。

そうだ、この戦いは有限だったのだと、今更ながら選手たちは気付く。残り一分、このまま同点ならば、延長戦だ。そうなったら圧倒的にダブルス有利。もはやエイブスに、延長戦を戦い抜く力など残されていない。リオスはカルハイムに進言する。

『キャプテン！ デイフェンスを固めましょう！ 延長戦なら、確実に勝てます！』

『……』  
『キャプテン！ 俺は、俺たちは勝ちたい！ 何としても！』

熱の入ったリオスの言葉に、一瞬気持ち揺らぐカルハイム。しかし、彼の中にある想いは、もっと熱を持っていた。『守りは固める。だが、それでは終わらん！』カルハイムの発言の意味が良く分

からないリオス。カルハイムは続けた。

『ボールを奪つたら、速攻を仕掛ける！ 絶対に守りには入るなっ  
！！』

『で、でも……』

『リオス、お前はザナルカンド・ダグルスの選手なんだぞ！？ ダ  
グルスの信条は“攻めこそ総て”！

守りに回って延長を選んだ時点で、俺たちの負けだ！ たとえ延  
長で勝つても、

俺はそれを勝利だとは認めない！ 攻めて攻めて攻め抜いて、そ  
れでここまで来たんだろうが！！』

『キャ、キャプテン……』

『リオス、カルハイムの言う通りだぜ。お前ら二人がいれば、必ず  
勝てる！

延長なんてクソくらえだ！ 残り一分でカタをつけてやろうじゃ  
ないか！』

M Fの選手が声をかけた。

リオスは、それでも納得がいかない。勝ちにこだわってこそそのダ  
グルスではないか。無闇に攻めて反撃を食らって、それでお仕舞い  
になったら眼も当てられない。その旨をカルハイムに告げようとし  
たとき、カルハイムはエイブスの方を見つめて言った。

『……済まない、リオス。これは俺の我が侂だ。俺は試合じゃなく  
て“あいつら”に勝ちたいんだよ』

『……』

『これつきりだ。俺の幼稚な我が侂に、付き合ってくれ』

『……来ますよ、キャプテン！！ クラウスさんを頼みます！！』

感情を露にするカルハイムの想いを感じ取ったりリオスの眼の色が

変わる。普段見せる、勝利至上主義者カルハイムの姿はもうそこにはなかった。憧れの選手たちと、同じフィールドで、同じボールを使って競い合うことを心から楽しむ、一人のブリッツボール・プレイヤーがいた。

カルハイムは力強く頷くと、マークするクラウドスへ向かっていく。最後の……一勝負だ！

『さア！ 来いエイブス！！』

鋭いフェイントでカルハイムを抜きにかかるクラウドス。だがそんなフェイントを物ともせず、ダグルスの闘将は渾身のタックルを見舞った。気合のこもった一撃で、吹き飛ばされるクラウドス。尚も群がるうとするダグルスDFを避け、クラウドスは味方のFWへパスを送った。これまでにない気迫を感じる。

（成る程！ そっちも延長を考えてないってことか！）

反転して体勢を整え、再びダグルスゴールへと向かうクラウドス。お互いの気合と気合がぶつかり合う好ゲームが展開されていた。エイブスFWもたちまちDFに囲まれ、成す術がない。『よこせエ！』切り込んできたジェクトにパスを出す。だが彼には、ぴったりとリオスが張り付いていた。

『ちい！ 一丁前にアツいディフェンスしやがるじゃねえか小僧！』

リオスの眼は完全にジェクトの持つボールだけを見据えていた。これだけ集中されては、フェイントも意味がない。仕方なく、FWにボールを戻す。『ジェクト！ DFを呼んでくれ！』クラウドスが叫んだ。

『な、何イ?!』

『この守り、三人じゃ切り崩すのは無理だ! KP以外の全フェイ  
ルダーを攻撃に参加させる!』

『そう言うと思ったぜ!』

すると既に、二人のDFがハーフラインを越えた位置まで上がっ  
てきていた。

『ば、バツカヤロー! 指示なしに勝手なこと……』

『いや、好判断だ! さすがはエイブスのDFだね!』

『だつとよジエクト!』

『……』

『時間がない! 二人に頼む仕事は……』

スタジアムがカウントダウンを始めた。残るは三十秒余り。歓声  
を通り越した大音響は、隣で応援する人が何を言っているのすら聞  
こえないほどだった。エイブスもダグルスも、時計を見ている暇な  
どない。エイブスDF二名の判断はこの場合、適切であったと言わ  
ざるを得ない。

クラウスへ戻ったボール。すぐさまカルハイムがマークにつく。  
彼にはもう、喋っている理性は残っていないかった。ボールを求める  
野獣の眼だ。クラウスはその迫力に圧される。

『行くぞジエクト!』

『よっしゃあ!』

ドリブルで強引にカルハイムの横を突破しようと試みる。その動  
きにぴったりとついてくるカルハイムを見て、心底恐ろしい男だと  
クラウスは思った。まるで今試合が始まったかのような動きだった  
からである。しかし、そんなカルハイムの気迫とて、想定内だ。

クラウドは横に陣取るジエクトへとパスを出す。勿論、そちらにはリオスの鉄壁。抜けずとも構わなかった。ただもうあと五メートル、ゴールに近付くことが出来さえすれば。

『おりああ!!』

ドクドクと異常なまでに高鳴る鼓動に合わせ、ジエクトが力任せにリオスを押し込める。リオスも負けじと身体を張り、ジエクトの動きを食い止めた。

(あと少しだったのに……このガキ……!)

『ジエクト! 危ない!!』

リオスに気を取られた瞬間を見計らい、ダグルスDFが一斉にジエクトへ襲い掛かる。不意を突かれ、ジエクトはその攻撃に反応出さない。

『やば……しまった!!』

DFの手がジエクトの持つボールにかかるうとした、そのときである。

『どおおっせえい!!』

『?!』

脇から飛び出したのは、先ほど合流したザナルカンド・エイブスのDFだった。身体を張ったタツクルで、ダグルスDFを引き剥がす。驚いたもう一人のダグルスDFがすかさずもう一度ジエクトに特攻を仕掛けるも……。

『おっしゃあー!!』

『うわっ! こゝ、こいつら……!?!』

こちらもエイブスDFが屈強なダグルスDFに勇敢な体当たり。  
そのまま、DF二人がジエクトとクラウドスに叫ぶ。

『俺らの仕事はここまでだぜ! あとは頼むぞオー!!』

『脇役魂を舐めんなよゴルアー!!』

これ以上ないくらいの働きをしてくれたDF二人。そして、エイブスFWも……。

『ジエクト、クラウドス! ここは任せろオー!!』

相手FWを必死で押さえ込む。仲間たちの雄姿に、ジエクトとクラウドスは思わず笑みをこぼす。

『や、やるじゃねえか脇役どもオー!』

『よし! 舞台は整ったぞ、ジエクトおっ!!』

『ほいさあー!!』

二人が同時に、カルハイムとリオスを睨む。瞬間、睨まれた両者に寒気が走った。

『な、何だ?! 一体何を……!』

(?! どうしてリオスと俺がこんなに近くに……!?!)

そこで初めて、カルハイムはジエクトとクラウドスに誘導されていたことに気付く。力押しの流れでここまで来たのかと最初は思ったが、それは間違いだった。全ては、“あのシュート”のためのお膳

立てだったのだ。ジエクトとクラウドが長年練習を重ね、今日が最初で最後の披露となる、ミラクルシュートの。『うお……おおおっ！！』リオスは眼の前でシュート体勢に入ったジエクトを見て驚愕した。マークの上から、決めるつもりなのか。

よける訳にはいかない。ここでボールを止めてしまえば、流れは一気に……。

『……………?!』

よけられるはずがなかった。

みしりと嫌な音が自分の腹の奥で聞こえ、ジエクトから放たれたボールがリオスの腹部にめり込む。呼吸が止まり、頭が真っ白になった。リバウンドするボール。その不規則な跳弾を予測し、“次の”ステップに進むため、コンマ一秒で動き出せるのは、クラウドしかない。

『な、何だと!? これは……………シュートじゃ……………』

『ああ、“まだ”ねっ』

今までのブリッツボール人生、全てを込めた一撃を、クラウドはカルハイム目掛けて放った。全く予想していなかった、“人間”へのシュートは、正確にカルハイムの顔を捉える。火花が散り、口の中が切れたのか、鉄の味が広がる。呼吸による溜めを奪われたリオスと、衝撃によって視界を奪われたカルハイムに、もはやディフェンス能力は存在しなかった。

そして次の跳弾は同時に、クラウド最後の“パス”でもあった。

『いけえっ！ぶちかませジエクトおっ!!』

ボールが跳ね返る角度を完璧に調整したクラウドスが、最後の力を振り絞り、激しく回転するジェクトに向かって叫ぶ。これが最後のアシスト。そして、天才スタープレイヤージェクトの雄姿を隣で見ることが出来る、最後の瞬間。

ジェクトも思った。

これが、クラウドスが自分にパスをくれる最後のとき。そして、このシュートこそ、クラウドスが最後に残してくれた、最高の贈り物！

凄まじい回転力。耳鳴りが脳内を迸る。血液が逆流し、思考が困難になる。決められないかも知れない。これほど難しいシュートだとは思わなかった。クラウドスは三年かかった。あの、真正正銘の天才でも三年の時を有したのだ。自分になど、到底無理だったのかも知れない。決められないかも知れない。このシュートを外せば、エイブスは確実に負けるだろう。クラウドスは悔いを残したままブリッツから去り、自分は一生このシュートを外したことを恥じながら生きていくのだろう。決められないかも知れない。

無理かも知れない。

不可能かも知れない。

外すかも知れない。

決められないかも知れない。

……でも、決める。

ジエクトは叫んだ。大きな声で、何かを叫んだ。何を叫んだのかは、本人も分からなかった。その声と共に、右脚に衝撃が走った。今までのシユートでは感じたことのない、激烈な衝撃だった。そして、ボールの重さが脚から遠ざかった瞬間、ジエクトは意識を失った。本当に、全てを込めた。もう二度と、これほどの威力を持つシユートは放てないだろう。そう確信させる、素晴らしい一撃だったのだから。

+++

気を失っていた時間は、そう長くなかった。

眼を覚ましたジエクトの眼に、まず飛び込んできたのは、クラウドの肩。どうやらクラウドだけではなくチームメイト全員がいるようだ。皆何かを口走り、ジエクトに抱きついている。水の中だから分からないが、誰もが涙を見せずに泣いているような顔をしていて、何となく可笑しかった。

徐々に意識がはつきりしていくにつれ、周囲の歓声もフェードインしてくる。呆然としてその場で頂垂れるダグルスの間々も、見えた。だが、今のジエクトにとってそれらは皆どうでも良かった。彼は第一に、シユートが決まったのかどうかを知りたかったのだ。まだ痺れの残る首を何とか動かし、ゴールの方向に半開きの眼を向けた。

そこに、あるはずのボールはなかった。決まっていればネットの

中にあるはずの、ボールはなかったのだ。ジエクトは愕然とした。自分は、シュートを外したのだ。あれほどチームが身体を張り、この一発のためにチャンスメイクしてくれたというのに……。全てを、台なしにしてしまった。何もかも、終わりなのだ……。ジエクトは泣きたくなかった。大声で泣き叫ぼうとした。

そして、ふとゴールネットの網目を見た。

一箇所だけ、突出して穴の大きな部分がある。整備ミスにしては度が過ぎたその穴を不審に重い、超回転によってまだ頭がぐるぐるしているのを懸命に堪え、ジエクトは誰かに尋ねようとした。そして、何気なく視線を傾けたその先に、スコアボードがあった。残り時間なし。スコア……。

3  
2

「……………え？」

思わず、ジエクトが声を漏らした。

「やった！ やったな！！ ジエクト！！」

クラウドの声がやっと耳に届く。

「お、おい……。ちょっと待て。俺は……。決めたのか？ シュートは………入ったのか！？」

「ああ！ もちろんだとも！！ 僕たちの優勝だ！ ジエクト！！」

『マ、マジかよ……』

正直、全く自信がなかった。まだ、勝利を得たということに対して実感が湧かない。

ボールはネットを突き破り、プールの上方で漂っていた。スタジアムは燃えた。奇跡の大逆転劇に酔いしれ、口々にジエクトとクラウドの名を叫んだ。

『だ、だってよう、俺……あのシュート……』

『天才なんだろう？』

クラウドが笑って言う。その表情を見た瞬間、ジエクトの中で、むくむくと活力が蘇った。

『……おうよ！！ 何たって俺様はザナルカンド・エイブスのエースだからな！！』

ジエクト！！

クラウド！！

歓声を受け入れるだけの余裕が戻ったジエクトは高笑いと共に手を振って応える。それは誰もが将来に光を見る、典型的なスター選手誕生であった。

『勝てると……思った』

そんなジエクトたちに話しかけたのは、今まで死力を尽くして争ったダグルス主将、カルハイムだった。

『いや、勝ちたかった。今回だけは、どうしても……。だが結局、

俺はお前たちに勝てなかった……。

そして、クラウドは今日が最後の試合だ。完全な状態のお前らを、叩きのめして、やりたかった……」

「カルハイム……」

クラウドは複雑な心境でライバルを見つめた。遠くではリオスが顔を覆って泣いている。涙は見る事が出来ないが、選手たちにははっきりと分かった。リオスだけではなく、ダグルスの誰もが敗北に打ちひしがれていた。

「ダグルスのコンビネーションも、秘策であるオフエンシヴ・ダイヤモンドも、全て破られた。

完敗だ。特に最後のシユートは……本当に度肝を抜かれたぜ。ちくしょう。

あれは何てシユートなんだ？」

「え？」

訊かれて、ジエクトはぎくりとした。名前など、決めていない。

「ディフェンスを無効化して、最後にクラウドが途中で見せたシユートに繋げたアレだ」

「あ、あれは……え」とお……」

「ジエクトシユートだ、カルハイム」

「そ、そう！ ジエクトシユート！ 俺様の名を冠した……って、ええ？！」

クラウドの言葉に眼を見開いて驚くジエクト。

「ジエクトシユート……」

「今回は二人でやったけど、次回からはジエクト一人で全部こなす

んだ。な？ ジェクト』  
『ぜ、全部一人って、オイ、ちょっと!!』  
『そうか……クラウドが抜けても、あのシュートがあっちゃ油断は出来ないな』

カルハイムは笑った。

彼の笑顔を見たのは初めてののような気がした。

『クラウドは、ジェクトと共に……か』  
『え?』

『クラウドが残したそのシュートの中に、クラウドはいる。俺はまだ、お前たち二人に挑めるんだ』

クラウドは微笑んだ。カルハイムもまた、晴れやかな表情。

『覚悟しろ、ジェクト。今度こそ、俺たちが勝つからな』

『……何度でもかかってこいや！ このジェクト様が蹴散らしてやつからよ!!』

『ふ、じゃあな、エース』

カルハイムはエイブスに背を向け、ロツカールームに引き揚げた。ライバルたちに背を向けた瞬間、それまで堪えていた涙が溢れ出す。水の中で、本当に良かったと思う。唇を歪ませ、悔しさに身を打ち振るわせたダグルスの闘将は、こうしてザナルカンド・エイブスに敗れた。

表彰式のあと、嵐のような祝勝会が催された。ザナルカンド・エイブスの選手たちは、優勝の喜びに浸り、このときばかりはクラウドも自分の引退を忘れ去ることが出来たのである。皆表情が輝いており、数時間前まで死力を尽くした戦いを繰り広げていた勇者たちとは思えないほど無邪気に楽しんでいた。

中でもジエクトはもう、見境なく暴れ回った。本当に、楽しい夜だった。

宴会が一段落し、メンバーが帰途に就き始めた頃、そこにクラウドの姿はなかった。興奮冷めやらぬ選手たちは遂にその事実気付く前に帰ってしまったが、ジエクトだけは違った。皆、クラウドがいるということに当たり前に思いついで、彼がチームから、そしてブリッツボールから去ることなど忘れ去っていたのだ。また一緒にブリッツボールが出来るのだと信じて疑わなかったのである。

それは当然のこと、ジエクトももう少して他のチームメイトと同じように、クラウド不在に気付かぬまま帰るところだった。ジエクトはすぐ、クラウドの居場所が分かった。血と汗と涙を共に流し、ずっとパートナーでいようと誓い合った、彼らの第二の家である。

薄暗い廊下を辿り、いつも一番に来て練習の準備を始めるクラウドの気持ちは垣間見る。

ザナルカンド・エイブスユースの練習施設は既に消灯されており、人の気配はどこにも感じられない。ジエクトは真っ直ぐロッカールームへ向かった。非常灯だけが頼りなく行く手を照らしている。

案の定、ドアの隙間から漏れる光を発見したジエクトは、少し脚を早めた。だが実のところ、クラウドにどんな言葉をかけたらいいのか分からない。なまじ付き合いが長い分、妙な気遣いが生まれてしまう。クラウドの心中を察すると、いかに鈍感なジエクトでも胸

が締め付けられる。そうこうしているうちに、もうドアノブに手をかけていた。ジエクトは深呼吸して、中に入る。

「お、おうクラウドス！ やっぱここにいたか！」

入ってすぐのベンチに、クラウドスは腰掛けていた。ジエクトに背中を向けているので、まだ表情は分からない。ジエクトの声に気付いたクラウドスが振り向く。その顔を見るのが、何となく怖かった。

「あ、何だジエクトか」

「何してやがんだ、こんな時間に」

予想していた表情とは正反対の、晴れやかな顔をしたクラウドスがいた。

「ロッカーを片付けてたんだ。もう僕には必要ないからね」

「そ、そうか。随分と気が早え話だな……」

「ああ。新しく入ってくる奴のためにも、早くロッカー空けておいた方がいいだろ」

まるで他人事のように、てきぱきと準備を進めるクラウドスを見て、ジエクトはどこか寒々しい気持ちになる。だがジエクトは随分とクラウドスに冷たく当たっていた事実が後ろめたくて、余り語気の強いことは言えない。気まずい沈黙が流れる。

「それにしても、今日は燃えたなあ」

クラウドスがぼつりと呟いた。

「お、おお！ 特にラストな！ まっさかあのシュートが決まるな

んて夢にも……」

自称天才にあるまじき発言なので、慌てて口を自分で押さえるジエクト。クラウスは笑った。そして、再び自分のロッカーの方を向いて、しばらく何か考えていたのだが、不意に……。

「ホント、楽しかった……」

「？」

「ブリッツって……メチャメチャ楽しいよ……なあ……」

「お、おい？」

「ちきしょう……何でだよ……もっと、もっとブリッツがしたいのに……！！！」

肩が震え出した。クラウスは額を押さえ、普段は絶対に出さないような、掠れる声で呻き始めた。そんなクラウスの姿を眼にしたジエクトの、全身の毛が逆立つ。あのクラウスが、泣いている。ぶつけようのない怒りと悲しみ、そして悔しさを吐き出すように、ジエクトの前で泣いているのだ。感情をここまで露わにするクラウスなど、見たことがない。いつも涼しげな顔で笑っている彼からは想像出来ない光景だった。

「クラウス……」

「済まない、ジエクト。僕は結局、約束を守れなかった……。お前と一緒にやるって言ったのに……」。

これからもずっと……ブリッツ……やるって……」

ピカピカに磨かれたロッカールームの床に、クラウスの涙が弾けた。ジエクトの震えが止まらない。もはやクラウスの喉からは正確な言葉が出てこなかった。猛烈な熱さが喉の奥からせり上がってきて、瞼の裏が痛かった。これまでのブリッツボールに賭けてきた人

生が走馬燈のように巡り、洪水となって溢れ出すのだ。

ジエクトはそれから何年経っても、そのあとクラウスが言った言葉  
を忘れることが出来ない。

「やめたく……ないよ……」

気付けばジエクトの視界も歪んでいた。言いようのない怒りがこ  
み上げて来る。何故これほどブリッツボールを愛する男が、その生  
き甲斐から引き裂かれなければならない。この世界に神というもの  
が存在するなら、今ジエクトは喜んでその神に唾することが出来る。  
クラウスは本当にブリッツボールが好きだった。今も、そしてこれ  
からも。変わらぬ事実の先に、もうブリッツボールを選手としてプ  
レイしている自分は……いない。

「……つくしょう!」

絞り出すように、ジエクトは言った。そして、歯を食いしばって  
涙を堪える。

「オイ、良く聞け相棒!」

クラウスは振り向かず、何の反応も示さなかった。だが、ジエク  
トは続ける。

「メソメソすんじゃないねえ……! 見てろ、俺様は絶対、ナンバーワ  
ンプレイヤーになってみせる!!」

そこで、お前の分も点を取りまくってやんぜ!! お前がいなく  
てもなあ……別に……俺は……!」

言葉が……続かない。

「……本当だよな、ジエクト」

続けたのは、クラウドだった。

「ナンバーワンになって、ザナルカンド・エイブスを最強のチームに……してくれるんだよな？」

「お、おおっ！！ 当たり前じゃねエかつ！！ 俺様はエース・オブ・ザ・ブリッツだぞっ！！」

お前なんかいなかったって……いなくたって……チキショーっ！！」

ジエクトは恥ずかしさで顔が燃え出しそうだった。制御弁が壊れてしまったのかと思われるほど、涙がこぼれてくる。クラウドは初めて振り向き、既に真っ赤になった眼で微笑んだ。

「頼んだよ……くそう……ホントに、頼んだからな……エース……」

「！！ ちくしょう……」

「まがぜろ！！ ……ううう……ぜっだい……なんばあわんに……ぎぎ……なっでやらあー！」

この日、二人は新たな約束をした。

お互いに泣きながら、半分笑いながら。

一人は世界ナンバーワンのブリッツボール・プレイヤーになると誓った。

そして、一人は……。

+++

十数年後……。

ザナルカンドのブリッツボールスタジアムは、興奮の坩堝と化していた。フィールドをぐるりと取り囲む観客席の熱気が、凄まじい螺旋となつて夜空へと吸い込まれていく。歓声はまるで津波。遙か彼方まで届くそれは、今日が特別な日であるということを経ナールカンド中に知らしめている。

フィールド内で目まぐるしく動き回る選手たちの一挙手一投足に数万の視線が注がれ、メガロポリスの夜は熱く燃えている。

その中で、一際眩い輝きを放つ一人の男がいた。

『うつしやあ！ ボールよこせエー！！』

『ジエクトさん！ 頼みますー！！』

ラストパスを男に送つたのは、今年新しくザナルカンド・エイブスの正チームに加入した期待のMF。ジエクトにボールが渡つた瞬間、スタジアムが地鳴りのような歓声に包まれた。立ちはだかる敵チームのDF。だが、ジエクトはにやりと不敵に笑つた。

「二人イ?! この俺様を止めたかったら……最低三人同時にしなア!!!」

一発目の蹴撃で、DFの一人を戦線から強制的に閉め出す。リバウンドしたボールの位置に正確なパンチングを繰り出し、二人目を撃墜。ジェクトは身体を縮め、最後の一撃を繰り出すために回転を始める。その回転力は、十数年前を遙かに凌ぐ凄まじいものだ。裂帛の気合いを込め、ジェクトはそのシユートを放った。世界最強のシユートが、稲妻の矢のごとく敵ゴールを貫く。

『出た~~~~!! 必殺ジェクトシユートおおおお!!』

ザナルカンド・エイブスのエース、いや、“エース・オブ・ザ・ブリッツ”ジェクト!

今夜も全開! 王者エイブス、前人未踏のリーグ四連覇に大きく近付いたああ~~~~っ!!』

大興奮のスタジアムの一角、選手の家族などが入って応援することを許されているファミリーボックスに、他選手の家族たちに混じって、独りつまらなそうに試合を眺める少年がいた。隣では彼の母親とおぼしき女性が、息子そっちのけで試合に夢中である。

少年の美しい金髪が、スタジアムに吹く熱風によって弄ばれている。

「……」

「どうだい? 試合は」

後ろから声をかけられ、少年は振り向いた。蒼い眼が、ブラウンの髪の毛を美しくなびかせた男性を映し出す。優しげな目尻に、人見知りの少年も気を許してすぐに返事をした。

「……まあまあ」

「まあまあか。君はジェクトの……お父さんの試合を見るのは初めて?」

「うん」

「お父さん、どうだい?」

「別に……毎日家で見てるから、普通だよ」

「はは、こいつは大した逸材だ。ジェクトの言う通りだな。将来は凄腕選手になりそうだ」

思いがけない男性の言葉に、少年は興味を示す。

「父さんが……?」

「ああ、もちろんだとも。会うたびに君の自慢ばかりさ。正直耳にタコが出来そうだ」

「……嘘だよ。だって家じゃ、父さん全然かまってくれないし、母さんだって……」

男性は少年の肩を叩いて、微笑んだ。

「お父さんのこと、嫌いかい?」

「……」

何も言わなかったが、少年は頷いた。プールではその父親が縦横無尽に泳ぎ回っている。男性は優しく語りかける。

「あいつの性格からして、子供に好かれるとは思わなかったけどね。じゃあ、ブリッツは嫌いかい?」

「……ううん、ブリッツは大好き! 将来は絶対父さんを超える選手になるんだ!」

少年は太陽のような笑顔を見せた。その笑顔で、男性は本当に救われた気がした。こうして、次世代を担う若い力が確実に育ってゆくのだ。自分の想いは……ブリッツボールに費やした青春の日々は、絶やされることなく脈々と継承されていくのだ。

無駄ではなかった。

あの日自分が信じたもの……それは、幻ではなかった。

「おじさん、父さんの知り合い？」

少年が訊いた。「僕かい？」男性は口元を綻ばせた。

「そうだなあ……知り合いつていうより、ライバルかな」

「ええ〜！？ ホント？！ じゃあブリッツの選手なの？！」

「今は違うけどね。カルハイムやりオスと同世代だったんだ」

「へえ〜！ へえ〜！！ じゃあそこそこ強かったんだね、おじさん！」

「はは、ありがとう」

そこへ、正装した威つい男がやって来た。

「クラウド社長、そろそろお時間が……」

「ああ、分かった。今行く」

「おじさん！」

少年が無垢な声でクラウドに声をかける。

そうか……もうおじさんと呼ばれてしまう年齢になってしまったのかと、少しだけ寂しい気もした。

「何だい？」

「僕、上手くなれるかな!？」

この子の瞳の中には、輝く未来が詰まっている。クラウドは心から嬉しくなり、満面の笑みを浮かべた。この子の父親とは、もう違う路を歩んでしまっているけれど、まだこうしてブリッツボールが好きなおじさんとして笑っていられる自分がいる。現役時代の昔話を肴に、酒宴で盛り上がることも出来る。何よりも、あの頃と何一つ変わらぬ想いはまだ、胸の中で熱く燃えているのだから。

スタジアムが一層の歓声に包まれた。スコアボードのエイブスの得点が、更に一つ積み重なる。得点者は勿論、クラウドの憧れた選手、ジエクトだ。両手を突き上げて喜ぶスター。ふと、ジエクトの視線がこちらへ飛んできた。ここにいることが分かるはずはない。だが昔から、見ていなくてもお互いの動きが手に取るように分かっていた二人が、こうして離れていてもお互いの存在を認識し合えることなど、ごく自然だった。

ジエクトはあの頃と同じように親指を立て、不敵に笑った。彼の息子は背を向けているため、クラウドがどうして懐かしそうに微笑んでいるのか分からない。ジエクトは何か言った。無論こちらに聞こえるはずはない。だがクラウドには、はっきりと彼の声が聞こえた。

『行くぜ、相棒』

と言った、ジエクトの声が。

「なれるさ……君なら」

「ホント!？」

「ああ。信じ続ければ、必ずね」

「信じる……?」

「信じるべきものを信じるんだ。今はお父さんのことが好きじゃないかも知れないけど、

そのうち分かるよ。あいつがどれだけ自分を信じ、仲間を信じ、戦ってきたのか。

君も分かる日が来るさ。僕とジェクトが、そうだったように……」

「そうかなあ」

「そうだとも。頑張るんだぞ！」

難しそうな顔をした少年。だがこの子は、成長してゆくだろう。

大人たちが黙っていても、必ず。そして様々な経験をするだろう。

それは楽しいことばかりではないかも知れない。眼を背け、逃げ出してしまいたくなる出来事に遭遇することもあるに違いない。でもきつと、この子なら乗り越えてゆける。クラウドはそう確信していた。

この子もまた、熱い想いを胸に抱きながら歩む。そしてその想いを継ぐ誰かが、この子を見て育つ。物語は語り継がれてゆくのだ。

主人公を転々としながら、人々の間をさながらブリッツボールのように駆け巡り、終わりなき旅へ出る。

クラウドはもう一度、プールを眺める。あの日あのととき、自分は確かにそこにいた。何もかもを忘れ、ただボールを追い、物語を作っていた。まだクラウドの物語は終わった訳ではない。一区切りがたっただけの話だ。路は無限に伸びている。何も、終わってなどないのだから。

緑の眼の中で、クラウドは見た。

宝石のように輝くプールの中で、最高の相棒と共に泳ぎ回る自らの姿を。トレードマークのバンダナが揺れ、彼はクラウドを見て拳を握る。そして、今日も自信たっぷりと言っ。

俺様とお前がいるザナルカンド・エイブスに勝てるチームが  
この世界に存在するかよ！

クラウドは答える。

心の底から、ブリッツボールという夢を追いかけて。

今日も勝つぞ、ジェクト！

少年たちが見た遠い日の夢は、決して幻ではない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7192o/>

---

遠い日の夢

2010年11月29日01時30分発行